

日系アメリカ人強制収容とアンセル・アダムズの写真記録

荒 このみ

1.

多木浩二は『写真論集成』（2003）の中で、ミシェル・フーコーに言及しながら、写真について論じている。写真はそれじたいが人間の意味作用の営みであり、何かを意味する「間接的思考」であるので、いわゆるドキュメンタリー、「非人称的」な記録写真と呼ばれるものであっても、意味体系の中で関連づけられ意味化されていく。「ミシェル・フーコー流に言えばドキュマンはいつでもモニュマン化される。それは記録を歴史にかえ、一種の神話的な空間に編成する意味論的な行為」（多木 62）である。

これから見ていくのは、第二次世界大戦中に、アメリカ合衆国大統領ローズヴェルトが発令した行政命令 9066 号により、集団による移住をよぎなくされた、いわゆる日系アメリカ人の強制収容所生活の記録写真である。全米に 10 ヶ所設けられた強制収容所の中でも、カリフォルニア州マンザナーに設営された収容所は最初のものであり、もっともよく知られた収容所である。マンザナー強制収容所の記録写真を撮ったのは、すでに著名だった写真家アンセル・アダムズであり、ドロシー・ラングであり、日系アメリカ人写真家宮武東洋などであった。

それぞれの写真家は、「ドキュマン」としてマンザナー強制収容所の日系人の生の営みを写し記録したはずだが、写し出されているマンザナーは決して同じではない。マンザナー強制収容所という歴史的トポスは、収容所の日系人を含め、写真家によって異なる「モニュマン」を生み出している。多木浩二は次のようにも言う。「(写されているもの)それは外なる事物の世界というよりは、われわれの意識の向こうからおくりかえされてくるもうひとつの意識すなわち自己のなかの他者の意識、あるいはその逆に他者のなかの自己なのである」（多木 41）と。そこに多木が認めているのは、「詩的にいえば神とよべる」力の相互作用であり、おのれを越える世界を「よびこむ」のであると説明する。「よびこまれた世界」のパイオニアとして、多木はユージェーヌ・アジェを挙げている。アジェの世界は、「日常的な眺める主体」はなく、同時に「外部としての世界」もない。「生は中断され、人間は還るべき世界を持たず、さまざまな秩序がもの音ひとつたてないのにひとりで逆さまに動きはじめる」（多木 41）のである。パリの隅々を写し出したアジェの世界を、マンザナー強制収容所の写真群とそのまま同列に論じることはいできない。けれども転住所、戦争、アメリカの信条、大自然というコンテクストの中にマンザナー強制収容所の写真群をおいてみると、「よびこまれた世界」をそこに見出すことができるのではないか。

マンザナー強制収容所のドキュメンタリー写真は、撮影した時期や写真家の主観によって異なる歴史的記述になっている。それぞれが描き出した「神話的空間」を読み解くのが、この論の目的である。

2.

もはや慰霊塔がその歴史を語るだけになったカリフォルニア州内陸の砂漠地帯に、一時的にはあるかもしれないが、人生の時間に比して決して短い時間ではなかった数年を記録するマンザナーの写真群を、私たちは注意深く読まねばならない。強制収容所は、1942年から46年をはじめまで存在した。そこへ西海岸に居住していた約12万人の日系人およびハワイ居住だった日系人の一部が送り込まれている。住みなれた我が家を強制退去させられた日系人は、急ぎょ転住所（アセンブリー・センター）に変貌した、馬を追い出した競馬場の厩舎や、フェアグラウンド（臨時展示場）に一時的に収容され、やがてバラック宿舍の強制収容所が建設されると、バスや鉄道でそれぞれの収容所へ送られて行った。

63年から64年にかけて、全米における日系人の最大人口を抱えるロスアンジェルスに私は暮らしている。ところが日系人との交わりの中で、一度たりとも戦時中の日系人強制収容所に関することが、積極的な話題になったことはない。当時、日系三世の多くが10代を迎え、ハイスクールに通うようになっており、多くの家庭において二世の親たちは子供たちと英語で理解しあっていた。二世の親たちが日本語や日本の習慣・文化をまったく教えなかったのではないが、三世のほとんどがすでに日本語を離れ、日本は親や祖父母の遠い祖国になっていたのだろう。また親の世代も多くは、子供たちがアメリカ人として教育されることを望んでいた。後にそのような三世の人々にたずねてみても、親が家庭で強制収容所体験を語ったことはほとんどないという。

三世のデイヴィッド・タカミは、自分の母親が収容所体験を話したがらなかったと述べている。「母親はキャンプにいました。でも何も話しませんでした。(略)人生でもっとも屈辱的な体験だった、ともらずだけで、それでこの話題は打ち切りでした」(Kashima 217)。ジーン・ワカツキ・ヒューズトンが、『マンザナーよ、さらば』(1973)を書いたのは、マンザナー生まれの従妹が、その出生地の「秘密」について自分の親は何も語ってくれない、と不思議な思いを打ち明けたことがきっかけだった。ドナ・K・ナガタは、調査対象者のひとりが、自分の父親はこだわらずに話してくれたらという、その内容を紹介している。二年間を収容所で暮らした父親は、面白おかしなエピソードばかりを語ったという。強制収容体験を全体としてどう思うのかとたずねると、「ひどくつらいってことはなかったよ」と答えたという。結局のところ、父親が体験した本当の感情や痛み、屈辱的だったことは自分たちの世代に語ってくれようとはしなかった(Nagata 87)。強制収容所を体験した一世・二世たちは、戦争中の忌まわしい体験を封印してきたのである。

収容所に関連した写真が一般の目によく触れられるようになるのは、1970年代以降、ようやく日系アメリカ人がその戦争体験を語るようになってからである。日系人たちは屈辱的な収容所体験を、ナチのホロコーストを体験したユダヤ人や広島・長崎の被爆者が、その歴史的体験に対して固く口を閉ざしていたように、忘却したい記憶として封印してきたのだった。戦後20数年を経て、収容所体験を日系アメリカ人が語り始めたのには、60年代後半のベトナム反戦運動の社会的雰囲気があっただろう。1966年に制定された情報公開法(FOIA)により公文書が公開され、FBI資料など部分的であれ、一般の人々が参照できるようになった、そのような連邦政府の姿勢の変化にもよっている。同時に強制収容所の跡地を巡礼する活動が盛んになり、

沈黙していた日系人やその子孫が歴史の一コマを確認する作業が進んでいく。いっぽうでは絶版になっていた写真集が復刻されるようになっていた。

60年代の当時、ロスアンジェルスに暮らすなかで、日系人の口から洩れる言葉に「しかたがない」という言葉があった。その背景に戦時中の強制収容所体験があるとつゆ知らず、かれらの「しかたがない」という境地は、マイノリティである日系人が今日のアメリカ社会で生き延びるためのすべなのだろうと、私は単純に解釈していた。日本を後にしたかれら日系人が、異なる文化・価値観の社会で生きるとき、かれらは一応に「しかたがない」と諦めなければ、命をつなぐことができなかつたのだろう。当時はそのように理解しただけだった。

強制収容に対して、「しかたがない」と諦め、従順に政府の命令に従うことが、自分たちの立場をよくするのだ、という考えによってかれらは素直に大統領令に従い、大きな反抗もせずにおとなしく行動した。フレッド・コレマツやゴードン・ヒラバヤシ、ミツエ・エンドウ、ミノル・ヤスイ、メアリー・ヴェンチュラの5人が、日系人のみに課せられた夜間外出禁止令、強制退去の違法性を訴えて、合衆国を相手取り法的手段をとったが、かれらの主張は認められなかった。1988年、レーガン大統領は、戦争中の日系アメリカ人強制収容は、憲法違反であったことを認め、生存者にはそれなりの賠償をしたが、賠償によって歴史的過誤が解消されたのではない。かえってその事実から、あらためて戦争中の日系人の体験を十分に認識し、歴史の教訓にせねばならない。

日系人はなぜかくもおとなしく、穏やかに、「しかたがない」と諦めて従順に強制収容を受け入れたのか。21世紀の視点から、権利を主張しなかつた日系人を批判するのは簡単だが、日系移民の歴史を背景に、かれらの判断を分析してみなければならない。20世紀初頭に始まる「黄禍（イエロー・ペリル）」のプロパガンダと扇動活動は、特に日系人人口の多かったカリフォルニア州において激しい。保守的白人は、日系人子弟の公立学校教育を阻止し（1906年）、1922年から52年まで日系一世に対して、アメリカ人への帰化を阻止する差別法が制定され、日系一世はいつまでも在留外国人（alien）であり、アメリカ社会に永住しながらアメリカ市民権を取ることはできず、永久に日本国籍の日本人であることを強いられる。ある二世は次のように強制収容時代の精神状況を説明している。

「当然のことですけれど、それ（強制収容）は公正を欠くと誰もが思っていました。けれど戦争前だって、カリフォルニアの日本人は、アメリカ人と同じには扱われなかつたんですもの。いつだってのけ者にされていました」（Nagata187）。正当に扱ってほしいと願いながら、「排除され不公平」に扱われることに慣れていかなければ、日本人はアメリカ社会で生き延びることができない。「しかたがない」という諦めの境地に至らざるを得なかつたのである。

移民についていえば、アジアからのみならずヨーロッパからの移民に対しても少なからぬ迫害や差別があったのは事実だが、白人と黄色人種の区別は厳然としてある。ヨーロッパからの白人移民であれば、アメリカ人としてすぐに認められ受け入れられる態勢がアメリカ社会にあったのに対し、アジアからの移民は、いくら年数を重ねても「日本人（ジャパニーズ）」や「中国人（チャイナマン）」であり続け、「アメリカ人」になることはもちろん、「ジャパニーズ・アメリカン」と呼ばれることさえなかつた。この事実は移民ではなかつた「アメリカの黒人」に対しても当てはまる。かれら奴隷の子孫である「アメリカの黒人」は、アメリカ生まれで、何世

代にもわたってアメリカ社会に暮らしながら、一般の「アメリカ人」とは今日ですら区別されている。たとえばかれらを今もってアメリカ人とは呼ばず、アフリカン・アメリカンと呼ぶところに、それは明らかだろう。

日本からの移民は1880年代に始まるが、移民の最大の動機は、明治政府の土地税法改定による農民への重い負担で (Fugita and Fernandez16),かれらの多くはハワイの砂糖キビ耕地へ入り、その後、本土へ再移住することがあった。日本国内での出稼ぎ者が遠くアメリカへ出稼ぎに行くこともあった。若者の中には徴兵のがれがいた。経済的理由からではなく、かえって裕福な親が、息子を兵隊に取られないようにアメリカへ送り出すことがあった。当初からアメリカに骨を埋める覚悟の者はいかなる比率を占めていただろうか。推測の域を出ないが、大多数が一旗挙げて日本へ帰ることを望んでいたのではないだろうか。

時間が流れて第二次大戦後の戦後世代の三世になると、もはや自分が純粋に日本人であるという意識は薄れてくる。アメリカ社会においてマイノリティではあるが、少なくともアメリカ市民権を所有する「アメリカ人」とであると主張することができるようになった。白人のアメリカ人と「社会的平等」を獲得していないことは厳然とした事実だったが、市民権においては同等であるという理性的論理で、かれらは自分たちのアメリカ人としてのアイデンティティを認識するようになっていた。

だがその間を占める多くの二世世代は複雑だった。法的に決してアメリカ人にはなれない日本人の親もとで育ち、学齢期になればアメリカ人としての教育を受けるようになる。いっぽう一世の中には自分の子供を日本へ送り、日本の学校へ通わせ、日本語、日本の風俗・習慣を学ばせる者が少なからずいた。日本人であり続ける一世にとって、自分たちの子供に日本の文化・伝統を学んでもらいたいと願ったとしても自然のことである。労働に明け暮れるかれらが、子供たちの養育をする時間的ゆとりがなかったことも、子供たちを日本へ送った理由の一つである。そのような二世の中には、十数年を日本で過ごし、その後、アメリカの両親の元へ戻って行ったという例もまれではない。かれらはずっとアメリカにいてアメリカの教育を受けた二世に比べ、一般的に英語能力が落ちる場合が多く、また日本の教育を受けた結果として、当然のことながら日本の価値観を身につけてアメリカへ帰ってきた。「帰米」と呼ばれたかれらは、ずっとアメリカにいた二世とは区別、あるいは差別された。

かれらは日系人社会のみならず、合衆国政府によっても区別され差別される。アメリカ国籍を有する帰米だったが、戦時においては日本のスパイではないかと疑念をもって見られていた。しかしまた連邦政府の軍事情報部で活躍したのはかれら帰米だった。参戦するより以前、早い時期から軍隊の日本語教育の重要性を認識していた連邦政府は、日本語教師として日系人を採用するが、そのときに活躍したのが帰米である。アメリカ生れでアメリカ育ちの二世の多くは、日本語能力が十分ではなく、日本語教師としての資格に欠けていたからである。

第二次世界大戦が始まる直前の1940年、全米48州のいわゆる日系人人口は、126,947人で、ハワイ準州には、それより多い、157,905人が住んでいた (Kashima 9)。48州に住む一世は、その約3分の1であり、二世はすでに3分の2を占めている (Kashima 9)。収容所に親とともに入ったり、収容所で生れた三世は、統計によるとすでに5,965人を数えるという (Kashima 10)。この数字が示しているのは、1942年の強制収容が実施されたとき、いわゆる日系人の3分の2は

二世であり、すなわちアメリカ市民権を持つ「アメリカ人」だったことである。ある統計によれば、三世を含めると強制収容所に入れられた日系人のうち、さらに多い78パーセントがアメリカ市民権を有していた。

3.

アメリカ合衆国における日系人人口がこのような構成になっていた20世紀の半ばちかく、日本国籍の一世世代とアメリカ国籍を持つ二世世代の断絶が見られるようになってくる。時間の流れと時代精神の変化は、二世の潜在的なアメリカ人意識に変化をもたらしたであろう。アメリカで教育を受けた二世は、日本語を十分に理解せず、自分のアイデンティティを日本へ求めるには困難になってきていた。日系人の組織では世代交代が起こり、1941年初め、日系市民連盟(JACL)の指導者だったマイク・マサオカは、「より偉大なるアメリカで、よりよきアメリカ人になる」(Muller 14)というスローガンを掲げる。日本人としての矜持を持ち続けている一世にとって、マサオカのような発想は革命的に斬新で、容易に理解できない考えかただった。自分たちはアメリカ社会に暮らしているが、民族的誇りとして日本人であるという意識は一世に強い。だがいっぽう人口比ですでにアメリカ市民権を持つ「アメリカ人」の二世が圧倒的多数になっていた。日系人の中で意見統一を図ることはかなり難しいことだった。

マサオカはJACLの代表として、日系人の強制退去・収容に関しておとなしく従うという統一見解・統一姿勢を求めたことで後に批判されるが、1942年3月3日付の新聞「ニチベイ（日米）」には、次のような記事が載っている。

「われわれが連邦政府とより緊密に協力すれば、われわれの問題解決に政府はより協力してくれることが期待できる」(Grodzins 195)。

脚注によれば、JACLの指導者たちは連邦政府当局と話し合いを持つまでは、強制収容に反対する意見がかなり強かったという。ところが、強制収容を否定すれば、保守派白人による日系人リンチの危険があると強く説得されたのだという(Grodzins 195)。排日法や日常的な人種差別を体験しているかれらに選択の余地はなかった。

いっぽう白人社会は、二世たちが本当にアメリカ合衆国に対して忠誠を誓うのであれば、行政命令に従うべきであるという見解を出していた。メアリー・ヴェンチュラ裁判で判事を務めたロイド・L・ブラックは、次のように公言している。「請願者がその内容どおりに合衆国に対して忠実であるのなら、議会、大統領、軍隊が、請願者やアメリカ合衆国で生まれた人々、あるいは帰化した人々のために、憲法・法律・制度を守る必要上で取る予防措置[夜間外出禁止令・強制収容]に、喜んで従うのではないか」(Nagata 23)。まるで17世紀の魔女裁判と同じではないか。魔女と目された人物に錘をつけ川に落とし、沈んだら魔女ではない、浮かび上がってきたら魔女だというテストである。どちらにしてもそこにあるのは死で、日系人の場合は、個人の権利の「死」である。当時の空気では強制収容や夜間外出禁止令に従わないことは、非愛国的な行為と見なされていた。

新世代である二世の未来は、日本国籍を持つ一世とちがってアメリカ社会で競争し、人生を築いていかねばならない。マサオカはモルモン教を信仰していたので、それもマサオカのアメ

リカ人意識を形成する大きな要素になっていただろう。「よきアメリカ人」になるという姿勢が、アメリカ的価値観、言い換えればヨーロッパ主義の価値観に盲目的に迎合するのではなく、アメリカの理念、アメリカの信条である民主主義、自由、平等を尊重するものであるとすれば、それは「より偉大なアメリカ」を建設することへつながり、「よりよきアメリカ人」になる誇りを日系アメリカ人に示すものであった。白人の価値観に支配されるアメリカ社会ではなく、日系移民を含めたマイノリティをアメリカ社会の同等の構成要員と認め、アメリカ社会を構築する一員としての平等性を認識する行為になるはずである。だが当時のマサオカが、そこまで認識していたかどうか。既成のアメリカ社会へ受け入れられることをひたすら願っていたのではないか。そこに JACL とその代表者マサオカの問題が潜んでいる。

4.

ローズヴェルト大統領の行政命令が、きわめて人種主義的であったのは、枢軸国ドイツやイタリアからの移民には、日系人に課されたような強制収容が実施されなかったことにもあらわれている。さらに強制収容された日系人のうち 78 パーセントがアメリカ生まれで、生得権としてアメリカ市民権を有する人口だったことである。その点ではジョン・ダワーの主張するように、太平洋戦争は「人種戦争」だった。なぜこのような憲法違反行為が大統領の名前で可能になってしまったのか。

1941 年 12 月 8 日 (7 日) の真珠湾攻撃が、アメリカ社会の姿勢を徹底的に変えた（ことになっている）。「リメンバー・パールハーバー」という合言葉は、帝国日本の攻撃性、野蛮性を強調した。卑怯な行動に出る悪の枢軸国の印象を、ひたすら一般に植えつけようと宣伝活動が強化された。西海岸の日系人を強制的に退去させ収容所に入れる必要があるほど、日系人のスパイ行動が恐れられたのか。現実的に危険分子がアメリカ社会にとって破壊的なほど多くいたのか。

すでに「パールハーバー」以前に、破壊分子に関する調査が行われている。国務省によって雇われた民間人で富豪のビジネスマン、カーティス・バートン・マンソンが、西海岸の日系人および日本人活動家をひそかに調べ上げ、その後にはハワイの日系人について調査し、1941 年 10 月および 11 月に大統領に報告書を提出している。

「西海岸にいわゆる日本人問題はありません。日本人が武装蜂起することは予想されません。(略) 概してこの地域の日本人は合衆国に対して忠実で、最悪の場合でも、静かにしていることで強制収容や無責任な暴徒から免れることを願っています。少なくともわれわれが戦争状態にある他の国家の、合衆国に居住している人種集団と比べて、忠誠心に欠けるということはありません」(Kashima 40)。戦争が勃発した場合、日系人は破壊行動に出ることはなく、ただただ静かにしているだろうとマンソンは述べている。「かれらは強制収容所 concentration camp へ入れられることをひたすら怖れています」(Robinson 67)。この報告書では、強制収容所 concentration camp という言葉が使用されていることにも注意を喚起しておきたい。

さらにマンソンは、日系人が身体的に目立ち、見極めがつきやすいので破壊行動に適さないこと、また日系人はほとんどが農業従事者、漁師、小売店経営者などであり、工場に入り込む

可能性も機械を破壊する可能性もまったくないと断言している（Kashima 40）。「戦争状態にある他の国家」すなわちドイツ、イタリアの移民のほうが人種的に見分けにくく、工員として工場に入る資格を持ち、破壊行動を起こす可能性が高いということを報告書は示唆している。

マンソンの報告は、50人から60人ぐらいの日系人「危険分子」がいるだけであり、西海岸に居住する何万人もの一世、あるいは二世を含む十数万人に比べたら、その数は微々たるものであるとつけ加えている（Kashima 41）。日本から送られてくる破壊分子はともかく、ハワイの日系人に関しても同様に問題がない、というのがマンソンの報告だった。

マンソンは日本語に通じた海軍情報局のケネス・リングルと共同で、日系人をどのように教育し、いかに利用すべきかを提案している。日系人には「お上からの通達」が効果を発揮することを指摘し、JACLのような組織を通して、政府は日系人を巧みに操作することが可能であること、赤十字や防衛組織などでかれらをヴォランティアとして働かせることが、強制収容するよりもよりよい方法であると結論づけている。日本人の親を敬う伝統に目をつけたかれらは、「よき行動の担保として日本人の親を敬愛する気持ちを利用すること」（Robinson 79）と明言している。一世が営々として築き上げた財産を二世は守らねばならないと心得ており、そのために決してお上にたてつくことはない（Robinson 79）。マンソンは調査の結果、日系社会を統御することができるかと確信し、このような提案をしたが、大統領はマンソンの日系社会統御計画に注意を払わなかった。

グレッグ・ロビンソンは、マンソンの報告に対抗する強硬派の立場を詳細に分析している（Robinson 第三章）。いっぽう「パールハーバー」のあと、強硬派の世論が勢いよく噴出する。潜在していた黄禍論がふたたび息を吹き返し、新聞・ラジオが世論をあおっていた（Robinson 91）。西海岸の名誉負傷軍組織は、西海岸に居住する日系人全員を強制退去するように大統領へ嘆願書を送った。「信用できないジャップ」を内陸へ移住させるようにと手紙を書いた市民や、シアトル在住の女性は、「わたしたちの神や理想、伝統に対して何ら敬愛の念も忠誠の気持ちも抱かないジャップを、わたしたちの愛する国から退去させるようにご配慮ください。そもそもかれらはこの国へ来るべきではなかったのです」（Robinson 91）と投書した。

いっぽう日系人の間には、自分の祖国がひどいことをしてしまい申し訳ない、恥ずかしいという気持ちを抱き、外からの排他的な抑圧をひたすら「しかたがない」と受け入れる心理的状況が生まれてもいた。

ユーゴスラヴィア生まれの評論家リス・アダミック（1899-1951）は、ヨーロッパ系アメリカ人の使命を説いた評論 *Two-Way Passage*（1941）で著名だったが、日系人強制収容を求めるヒステリー状況について、ローズヴェルト大統領へ進言している。すなわち狂信的愛国者の集団やメディアがヒステリー状況に油を注いでいる、その背後には、「農業利益」に関する利害関係があると。だがそれを聞いた大統領夫人エリノアは、その2日前には一世と二世の忠誠心を信じてと発表し、全面的強制退去には反対していたにもかかわらず、次のように反応したという。「でも西海岸の日系人が日本政府のスパイ容疑で逮捕されているのですよ」（Robinson 94）。

その断固とした口調と有無を言わせぬ雰囲気にはアダミックは驚いたと記している。ロビンソンはこれを大統領の判断材料となる情報が錯綜していたこと、戦争時の緊張状態のあらわれと解釈する（Robinson 94）。市民感情を冷静に判断することがいかに困難であったか。正しい情報

が大統領に十分に伝わらなかったことは考えられる。

戦争に勝利するという究極的な目標の前で、日系人の強制収容はローズヴェルト大統領にとっ
てたいしたことではなかった。ロビンソンによれば、「ローズヴェルトの過ちは、同情の気持ち
がなかったこと、もっと正確に言うなら、感情移入ができなかったこと」(Robinson 123) であ
るという。そして「戦争が終わったら、かれらは元に戻る。(略)戦争じたいに比べればたいし
たことではない」(Robinson 124) という大統領の言葉を引用し、「大統領の決断を支配したのは
積極的な悪意ではなく、無関心だった」(Robinson 124) という。

大統領が日系人の強制収容をたいしたことだとは考えていなかったこと、日系人の強制収容
について無関心でいられたこと、それこそが大統領の大罪なのである。無関心なほどに日系人
の人権を認識していない。日系人の強制移住に関わったジョン・L・ドゥウィット将軍は、西海
岸に居住するドイツ人およびイタリア人の集団的強制移住を大統領に提言していた。カリフォル
ニア州のイタリア人移民の数は、日系一世より上回っていた (Robinson 112)。ところが大統領
は、その提言を受け入れず、独伊のスパイ活動が盛んだと推測されていた東海岸に居住する
ドイツ人、イタリア人へ、行政命令 9066 号が及ぶことを阻止した (Robinson 111)。枢軸国のイ
タリア人やドイツ人の強制収容については無関心ではなかったところに問題が潜在する。この
点におけるローズヴェルト大統領の白人優先主義は明らかではないか。

「パールハーバー」のあと、恐怖の世論喚起はたやすい。ハワイの次には西海岸が日本空軍に
よって襲撃されるかもしれない、その手引きを西海岸の日系人がしているにちがいない、とい
う恐怖心が一般のアメリカ市民に植えつけられていった。このような世論の動きがローズヴェ
ルト大統領の決断を促したのだろうか。1930年代初めからすでに反日の思想を強くしていた大
統領は、「パールハーバー」後のアメリカ社会の空気に、より強い反日感情を募らせたのだろう。
日本人である一世と、アメリカ市民である二世のアイデンティティ意識の差にいたっては、ロー
ズヴェルト大統領には想像すらできなかったにちがいない。日系人は十把ひとからげに黄色人
種であり、ゆえに信用できないと結論づけてしまうのは、大統領にかぎったことではない。

マンソンの報告書が、「パールハーバー」のはるか以前に依頼され、12月7日以前の10月、
11月に提出されていることにも留意せねばならない。すでにアメリカ政府は、西海岸の日系人
の強制収容を念頭におきながら、このような調査を依頼していたと推測される。

5.

当局のひそかな監視の下におかれていた西海岸の日系人は、2、3百人とも言われているが、
マンソンの報告によれば、ブラックリストに載る規準は、たとえば「ある宴会で、いささか日
本びいきの発言をした」(Kashima 40) というだけで十分だったそうである。それほど些細な理
由でブラックリストに載ったのであり、それでも2、3百人しか挙げられなかった。このような
事実注目しておかねばならない。そして「パールハーバー」以降は、多くの日系人指導者、
組織の代表者が、ただリーダーであるという理由でFBIの逮捕の対象になった。かれらは非米
活動をしたのではなく、アメリカ社会において日系人が安全に安心して暮らすための団体のリー
ダーである。理由も告げられずに逮捕され、連行されていった一世や二世たちの例は事欠かない。

かれらの家族はその行き先も知らず、数年にわたって生き別れになった場合もある。

そのような一人、ゲンジ・ミウラの例をカシマ・テツデンが『裁判なき判決』で紹介している。

シアトルにある小さなレストラン経営者、一世のゲンジ・ミウラは、12月7日の夕方に、当局の4人の男の訪問を受け、逮捕されたと告げられる。その理由をたずねても、「お前はパールハーバーのことを知っているか。自分たちは逮捕し刑務所へ連行するように指示されている」（Kashima 56）と答えるのみである。その申し立ては、以下の通りだった。1. 父母および妹が日本在住。2. 日系商工会議所、日系北西連盟、日系北西組織のメンバーおよび幹部として、戦争救済資金を募集。3. 日系組織の代表として日本帝国紀元節祝典に招待され、在シアトル領事から褒章される。4. シアトル日本語学校 PTA 副会長。

これら四点の理由で、ミウラは「パールハーバー」の日から、1943年11月16日まで約2年間、家族と切り離され、アメリカ各地の軍事施設や刑務所を転々とさせられたのである。理由のどれ一つをとっても、市民生活を順当に送る普通の市民のありかたを逸脱していない。なおかつミウラは、アメリカ順応主義であった、と後に報告されている。ミウラ逮捕後の、法務省の報告書資料によると、ミウラには破壊行動の危険はなく、「日系社会で活躍していたが、アメリカ化を推進する指導者だったという証拠がある」（Kashima 57）という、ミウラにとって都合のよい報告書であったにもかかわらず、逮捕され拘留され続けるという理不尽に、日系社会は恐怖を感じたにちがいない。

ある日、突然、当局がやってきて理由を告げられることもなく逮捕され、一家の大黒柱が連れ去られていく。残された家族や周囲の日系人が、すぐに法的手段に訴えるという行動に出ることができるだろうか。すでに理不尽な排日法にひどく苦しめられてきた。そのような体験を持つかれらが、一方的に日本は卑怯であると喧伝された「パールハーバー」の後で、何も悪いことはしていないにもかかわらず、おとなしくなってしまうとしても不思議ではない。排日法に苦しめられ、アメリカ社会の権力の前でいくら抵抗してもなるようにしかならない。不条理だと感じながらも大多数の日系人は、「しかたがない」という諦めの境地に到らざるをえないのである。

『市民 13660 号』を書いた三世（母親は日本から渡米しているため二世でもある）のミネ・オークボは、州立カリフォルニア大学を卒業した美術専攻の学生で、第二次世界大戦が勃発したときには、奨学金を得てヨーロッパで勉強していた。あわててアメリカへ帰国したオークボは、1942年4月24日に発令された「民間人追放令第19号」により強制収容所へ送られることになる。オークボの描いたスケッチと短文を載せた『市民 13660 号』には、赤裸々な収容所生活が「暴露」されている。強制収容の「恐怖」についてオークボは次のように述べている。

「初めのうちは、二世までが立退かされるはずがないと思い込んでいた。二世は日本人の血を受けているが、アメリカ市民なのである。でも、一世は、つまり日本生れの父母たち、アメリカの法律により、帰化して市民となる道を阻まれていた一世は、多分、日本と合衆国とが交戦するようなことでもなれば、抑留されることになるのでは、と怖れてはいた。だから、市民権の如何にかかわりなく、全員が無差別に立退きを命じられたと知ったとき、それは正に一大恐怖であった」（オークボ 14）。

この文章から読み取れるのは、日系人の間ですでに強制立ち退きの噂が広まっていたことで

ある。そしてオークボの感想が、おそらく二世の気持ちを代表しているだろう。アメリカ市民であるにもかかわらず立退かされるのは、「恐怖」いがいの何ものでもない。ナチのホロコーストの記録写真にしばしばあらわれた、人々の「恐怖」の表情が思い起こされる。両手を挙げてすべてに従う意志をあらわしたユダヤの少年の写真が思い起こされる。理不尽な武装権力の行使の前で、無力な一般市民はなすすべもなく、ただ「恐怖」にとらわれ、お上の命じるまゝに従う。理性的に論理的に権利の主張をして、権力構造に立ち向かう勇気を持つことなど平均的市民にはできない。JACLが統一見解として強制収容を受け入れようと決定したとき、かれら一般の日系市民はそれが一番よい対処のしかたであると考えたのである。

奴隷制度時代のアメリカ社会で、黒人奴隷は理不尽な白人の主人の命令の前で、「シグニファイイング」という行為で切り抜けた。「シグニファイイング」とは、アフリカの伝統に見られる相手を欺く言葉のゲームだったが、アメリカの黒人奴隷は「馬鹿な振り」をして白人の優越感をくすぐり、絶対的な抵抗をせずに無茶な要求を免れようとした。白人の過酷な仕打ちを避け、その恐怖をやわらげるために、「シグニファイイング」という表現手段を使って生き延びたのである。まともに白人と闘うことはできない。何百年も続いた過酷な奴隷制度にもかかわらず、かれら「アメリカの黒人」が生き延びることができたのは、「シグニファイイング」という手段で命をつないできたからでもある。日系アメリカ人もまた同じように、命を賭けて抵抗することをせずに、穏やかに命令に従うことで命をつないできた。アメリカ社会の構造的な人種差別の中で、白人保守主義者によるリンチによってさらなる悲劇を生み出すよりは、従順に強制収容令を受け入れたほうがよいだろうと大多数の日系人は考えた。マサオカの個人的な傾向は定かではないが、当時の人種差別的時代精神を背景に、それが日系社会にとって「よりよい」選択だと考えたのである。「しかたがない」という境地は、その究極的なあらわれだった。

このようにして強制収容に関して大きな反対運動も起こらずに、日系人は粛々と従った。だがそれがいくら「よりよい」選択であったにしても、名前を剥奪され、その代わりに番号をつけられ市民何号と呼ばれ、有刺鉄線に囲まれ、武装監視員に監視塔から見張られ、サーチライトを照らされ、タール塗りの簡易バラックに住み、共同食堂で時間制限をされながら三度の食事をする生活が、異常であったことに変わりはない。転住の手続きの過程で、自分の名前を失い、自己証明が家族の番号化という「数字」に変わってしまったときの感情を、ある日系人は次のように述べている。

「ハリーは統制局へ申請に行き、10170と記された札を20枚、持ち帰ってきました。すべての荷物に札をつけ、一枚は各人が上着の襟につけることになっていました。そのときから私たちは、家族番号10710になったのです。私のアイデンティティはなくなりました。プライベートも威厳も」(Creef 48)。

番号化され、名前を失うことは、根源的な人間性の剥奪である。そのような規制のもとでの暮らしは、日系人であろうがだれであろうが屈辱的であった。二世のヒロシ・カシワギは後に強制収容を次のように振り返っている。

「テューリー・レイク、そこは牢屋だったよ。このことを言っておきたいね。じっさい有刺鉄線が張り巡らされ、ライフルや機関銃を構えたMPのいる監視塔があった。近寄りたりしなかったよ。殺されたらいやだからね。銃で撃たれた奴がいたんだ。だがな、物理的に閉じ込められ

ていたこともそうだが、それより自分たちの気持ちに柵を作ってしまったこと、強制収容で一番の精神的破壊は気持ちの封鎖だね」（Fugita 61）。

この聞き書きは、2000年に実施されていることに留意しておかねばならない。時間の隔たりがあって初めて二世たちはようやく口を開くことができたのである。距離を置いて強制収容を分析することができるようになったのだ。それでも自由に十分に客観的になれたかという点、多くの収容所体験者にとって、やはり語りたくない過去であったことは否定できない。子供時代を収容所で過ごした三世のジェリー・アソはインタビューに答えて、収容所体験を次のように打ち明けている。

「大変な恥だったよ。深い恥だった。政府だって恥を感じたのだろうが、それは拡散してはつきりしない。でも強制収容は自分が感じる恥だった。何も悪いことをしていないのに、汚点を背負っているんだ。それは自分の一部で、自分を作っている」（Creaf 56）。

日本人を罪の意識ではなく、恥の意識の民族だと規定したルース・ベネディクトの『菊と刀』を持ち出すまでもなく、ジェリー・アソの恥の意識は、十分に納得できる感覚である。大きな権力、大きな価値観のもとで抑圧された民族は、自分の力、立場、価値観を恥づかしいもの、劣等なものとする。そのように教えこまれるからである。日系人が「何も悪いことをしていないのに、汚点を背負っている」というのは、ごく自然な感情であり、まさにこの恥の意識、理不尽な劣等意識が、戦後かれらを沈黙させたのである。

ミネ・オークボは、自分が住んでいたカリフォルニア州パークリーのいたるところに張り出された「民間人追放令」に驚愕したが、強制退去を示す英語は *evacuation* であり、この高札は "Evacuation Order NO.19" と記されていた。強制退去 (*evacuation*) とは、通常、地震・火事・洪水・大嵐・飢饉などの災害で居住が困難になった地域から、住民を安全な場所に避難させることを意味する。合衆国政府は、この特殊な日系人強制収容をどのように表現するか戸惑ったにちがいない。そこで使用されたのが強制退去という単語である。だがこの単語の意味とは裏腹に、安全な場所へ避難させてくれるという安心感ではなく、どこへ隔離されるのか、日系人は不安を募らせる。テツデン・カシマは、強制退去という婉曲表現にも関わらず、日系人が抱いた恐怖を、「かれらは日々、恐怖と不安を募らせ、倦怠感、絶望感を抱いていた。その日暮らして、未来の予測も計画も立てられなかった」（Kashima 8）と記している。強制収容の不安は、いつまでこの状況が継続するのか見当がつかないことである。

強制収容所という表現は、マンソンの報告書で使われていたが、正式に日系人を収容することになったとき、強制収容所 (*concentration camp*) という表現は消えていた。マンザナー収容所の英語名は、*Manzanar War Relocation Center*（マンザナー戦時転住センター）であり、収容されている日系人は、転住者 (*relocatees*) あるいは強制退去者 (*evacuees*) である。そのどこにも強制収容を暗示する意味は見られない。アメリカ市民権を持つ二世は、一世の *aliens* と区別されるために *non-aliens* と呼ばれたが、「非・外国人」とはいったい何人であるのか、おかしなことである。*relocation*（転住）ではなく、*internment*（拘禁・抑留）、*incarceration*（拘禁・施設収容）などが現実を踏まえた表現だろう。だがその婉曲話法に見られるように、戦時中の日系人強制収容じたいが矛盾をふくむ行政命令だったのである。

戦争がいつ終わるかわからない中で、日系人は自分たちの生活設計をすることはできない。

夢を未来に実現しようと汗水たらして働いてきた一世にとって、すべてを剥奪された「強制退去」は営々と築き上げてきたこれまでの暮らしの崩壊であり、自分たちの人生の否定だった。若い二世は、これまでアメリカの学校で白人学童と机を並べ、かれらと共に毎朝、国旗への忠誠を唱和し、学業に励んできた。ところがある日突然、勉強の道を断ち切られる。高校卒業年度で州立カリフォルニア大学への進学が決まっていた成績優秀な二世が、強制収容により進学不可能になる。若い者にとっては自分の未来に塞がった壁に大いに戸惑い、絶望したにちがいない。あるいは、病気の老母を抱えた者もいた。それでも病院から追い出され、まだ病院設備の整わない強制収容所へ退去せねばならなかった。

それぞれの人生の段階で、強制収容所は「絶望」を人々に味あわせた。分別のまだない子供たちの中には、集団生活のにぎやかさを楽しみ、これまでのように家族の農場労働の手伝いをせずにすむ収容所暮らしを「楽ちん」だと感じた者もいたようである。あるいは身寄りのない老人が、三食が保証される収容所暮らしを悪くないと感じた例がなかったわけではない。「キャンプ（強制収容所）は楽しい冒険の場みたいだったわ」と三世の問いに答えた二世の母親がいる（Nagata 87）。日系社会では十分に楽しめなかった男女の交際やダンス・パーティ、音楽会など社交の数々をキャンプの中では体験できた。そのような記憶は若い二世にとっては楽しい思い出になっただろう。ある統計では、収容所暮らしのよかった点として、半分以上の回答者（51.6%）が友人のできたことを挙げ、また三割近く（28.3%）が、社交活動を挙げている（Fugita 61）。テューリ・レイク収容所では、まるで日本にある日本家屋の一室と見まがうような和室で、茶道教室が開かれている様子を写した写真がある（Eaton 113）。『有刺鉄線の向こうの美』を著したアレン・H・イートンは、テューリ・レイク強制収容所内の茶道教室を紹介し、すべてを剥奪された日系人が日常の中で美を求め、「不完全な世界の中に完全を求めようと努力していた」（Eaton 112）と記している。

強制収容体験をしたときの年齢によって、その受け入れかたは違っている。だが強制収容所が健全なコミュニティであるはずがなかった。忌まわしい体験だったからこそ、戦後、日系人は沈黙を選び、その記憶を消し去りたいと願ったのである。

6.

以上のような政治的・社会的・歴史的状況を踏まえて、私たちはマンザナー強制収容所の記録を目にしなければならない。アンセル・アダムズ、ドロシー・ラング、宮武東洋（トーヨー・ミヤタケ）の写真集がドキュメンタリーとしてどのように読まれるのか、残された記録写真は「マンザナー」の何を語るのか。いかなる「モニュメント」になっているのか。

三人の写真家は、それぞれマンザナーを写した時期が異なっている。ラングは強制退去で日系人が臨時のアセンブリー・センターへ出頭する時期、すなわち1942年の春から撮りはじめ、宮武は自分自身と家族が収容所に暮らした中で、写真を撮り続け、最後の年には収容所の正式写真係に任命されている。アダムズは1943年に、友人のラルフ・メリット所長の勧めで収容所を訪れ、記録を残した。アダムズがマンザナー強制収容所を訪れたのは、収容所が開所してから一年がたったときである。万事に設備の整わない状況からは、だいぶ改善されていた。たっ

た一年の時間の経過が大きな差異を生み出している。そのころに写されたものとラングのように初期から写している写真を同列に論じて読むことはできない。

アンセル・アダムズはマンザナーの写真群について、あとがきに説明を付し、使用したカメラ、レンズ、フラッシュについて詳細な記録を残している。その中で強調しているのは、写真を撮るにあたって、不自然さを極力排除しようと努めた点である。記録写真（フォト・ドキュメンテーション）において「リアリティと確信」がまったくのところ一番重要であり、そのためには、対象者が気取らずに自然に協力してくれることが絶対条件である、とアダムズは言う（Adams121）。

マンザナー強制収容所の記録では、「集団より個人が最重要であると感じた。ある意味では、各個人が集団をきわめてはっきりと露呈する」（Adams 121）ともアダムズは記す。アダムズはそれまでたしかにアメリカの西部の雄大な自然を撮り続けてきたが、マンザナーの「記録写真」には、個人の顔の大写しがたくさん収められている。しかもかれらは直接レンズを見つめている。「斜めから撮影するのでは個性が薄れる」というアダムズの信念で、写された個人は、「レンズを直視し、したがって見る者を直視している」（Adams 121）。自然光やフラッシュの使用法についての説明では、可能なかぎり「自然」に近い状態を追求し、技巧的な光やぼかしなどは避けたと説明している。

アダムズはそれまでアメリカの大自然を写して著名だったが、自然風景の写真と、収容所内の個人写真の撮影にどのような差異を感じたのだろうか。

1944年、『自由と平等のもとに生れて——忠実な日系アメリカ人の物語』という、きわめてメッセージ性の高い、しかもきわめてアメリカ的なタイトルをつけて、アダムズの写真集は刊行された。2002年、同名のタイトルで復刊された写真集を私たちは手に取ることができる。数枚の写真が削除され、その代わりに別の写真が数枚、収録されているが、オリジナルとほとんど変わらないという但し書きがついている。2002年版の写真集をもとに、アンセル・アダムズの記録写真を見ていく。

約1万人の人口を抱えたマンザナー収容所は、アメリカの「スモール・タウン」の典型ととえていいだろう。いや町の大通りが数ブロックも続かない現実のスモール・タウンよりはるかに大規模で、居住者も多く、ひとつの小都会と呼ぶことさえできる。だがスモール・タウンと趣きが異なるのは、だだっ広い砂地にすべてが含まれていることである。土地の隆起もなければ、道路と見なせる空間はあっても、大通りと屋敷の区別はない。並木もなければ、街角もない。すべてが平坦な土地の上に、バラックの長屋があり、運動場があり、共同食堂があり、そのようなバラックの一つが公共の領域として店屋に当てられる。収容所の敷地内に自然の川はなく、したがって水鳥もいなければ、水辺に棲む虫もいなければ小動物もない。周囲は有刺鉄線で囲まれている。その中で最低の食住が確保されていたとはいえ、それを日常生活と呼ぶことはできない。

1943年、アメリカ人として何らかの形で国家の戦争に貢献したいと熱望していたアンセル・アダムズは、職業である写真家の技術を記録写真の撮影に向けた。それが真摯な望みであったことは、アダムズが美術史家で友人のポーモント・ニューホールの妻ナンシーに宛てた1943年

の書簡にも明らかである。すでにマンザナーの記録写真を撮り、いくばくかの戦争への貢献をなした後だったが、軍隊の一員としてヨーロッパ戦線に派遣されているボーモントを羨望する言葉が記されている。「国家への貢献をなしていることを羨ましく思います」(Alinder and Stillman 148)。だれもが戦争に関わり、アメリカのために闘いたいという空気が広がっていたようである。

アダムズはマンザナーの写真群がアメリカの歴史の貴重な資料になると考えていた。オリジナル版へ寄せたテキストの中で、マンザナーを「小さな都会、よく管理され、生き生きしている。典型的なアメリカの都会の小規模な姿である」(Adams 37)と描写する。そしてマンザナーは、「戦時転住のマイノリティ集団にとって適切な避難所」であり、「よく組織されたアメリカのコミュニティにひそむ意気と姿勢があり、さらにここには強制退去の衝撃から、ある種の緊張感と忍耐力が見られる」(Adams 37)と記している。

アダムズのこのテキストを見開きにして、反対側の頁全体を覆っている写真は、10代の日系二世が三々五々、学校へ通う姿である。バラックを遠景にスカート姿の、またズボンをはいた女子高校生が、それぞれ教科書を抱きかかえ、にこやかに談笑しながら学校へ向かっている。当時、流行のツートン・カラーの靴を履いている学生がいる。1人だけ男子学生が映っている。クルーカットの髪型、右手で教科書を抱え、左手をズボンのポケットに入れ、足をまっすぐに伸ばして自信に溢れて歩く姿は、当時の10代の典型的なアメリカの高校生を映し出している。やや高みから撮られたこの風景は、希望に溢れる若い世代の「アメリカ人」が、希望の未来へ向かって歩む一場面である。

だが木が一本も生えていない、この広々とした砂地の「道路」を歩くかれらにとって、この通学風景は、本当に希望の未来へ向かう構図なのだろうか。にこやかな表情の裏に何が潜んでいるのか。ミネ・オークボは砂嵐に悩まされたトパーズ収容所体験を書き残している。髪の毛の中まで砂だらけになってしまう現実、この写真からは読み取れない。

あるがままのドキュメンタリー、自然のままの通学風景のように見えながら、じっさいは、計算され、配置され、指図された可能性もあるのではないだろうか。三々五々、すなわち、3人、3人、2人、1人、2人、しばらく距離をおいて2人、3人、4人、2人と映し出された人数配分の構図上のバランスのよさ、前景の3人の女子学生のスマイルなど決して「自然な」表情とは思えない。それともかれら自身が構えられたカメラを意識してほほえんでしまった結果なのだろうか。

アダムズは日系アメリカ人の収容所体験を、「アメリカ市民への道のりの岩場の多い困難な、戦時中のほんの迂回路」(Adams 37)と見なしている。この写真に付けられたキャプションもまた「マンザナーはアメリカ市民への道のりのほんの迂回路」となっている。アダムズは、日系人の強制収容を大統領の正しい決断とは考えていなかったのだろう。日系二世がアメリカ市民であることを否定することはなかった。アメリカ市民であると強調させている。迂回路であれ、「アメリカ市民」を証明するために、戦争という緊急事態においてはいたしかたのないプロセスだった、とアダムズは考えているように、そのテキストからは読み取れる。

10代の高校生こそ未来のアメリカを担う世代であり、希望の未来を予感させる存在である。かれらの群像を映し出したのは、そのような一場面が強制収容所生活にあるのだという、肯定

的な事実の確認だった。収容所の中にあっても、若い世代はアメリカの未来を夢見て勉学に励み、「岩場の多い困難な迂回路」を歩みながら、アメリカ市民としての「義務」に従っている。それはアメリカ社会という共同体の一員としての資質を育み、確認する作業である。アダムズの写真は、そのように語っているのではないか。

それでも疑問が残る。かれら高校生は本当に学校の校舎へ向かっているのだろうか。いったいどこへ、何に希望を抱いて進んでいるのか。ハイスクール・ライフを象徴するキャンパスはどこにも見えない。

マンザナー高校には、アメリカ人職員の子弟が一人二人混じっていたが、それ以外は当然のことながら日系人だけの高校で、平均的学力は高く、後にカリフォルニア州の優秀な公立高校として認定されることになる。強制収容所という異常な環境の日系人高校が、そのような認定を受けたことをどのように受け取ればよいのか。アメリカの歴史の皮肉である。

収容所の日系人はアメリカ市民である、とアダムズが強調する写真は他にもある。「アメリカの家族」と題された連作写真である。ナカムラ家の母親、その2人のローティーンの娘たちをそれぞれ写した肖像写真が収められている。3人ともに美しい微笑を浮かべてカメラを直視している。子供たちは髪を縦ロールに巻き、リボンをつけ、花柄のかわいらしいエプロン着や、アップリケで縁取られた襟の、モダンなデザインの洋服を着ている。収容所でこれ以上ないおしゃれをしたところだろう。当時の祖国日本の娘からみれば、かれらの身なりは飛び抜けておしゃれで、素敵で、うらやましいほどに豪華である。ローティーンの少女であれば、あのような洋服を着せてもらえば、自然と笑みがこぼれたかもしれない。

その肖像写真に「アメリカの家族」というタイトルをつけたアダムズは、何を伝えようとしたのか。どういうわけか建築家の父親の写真は収録されていないが、特に意味はないのだろう。アダムズのテキストによると、ナカムラ一家は、翌年、1944年秋には東部へ転住する予定である。専門職の父親と家庭の主婦であり母親だったというナカムラ夫人は、南カリフォルニア大学卒業の学士である。東部にかれらの未来がある、とアダムズは暗示しているのだろう。ちなみに復刻版の写真集の表紙を飾っているのは、微笑むナカムラ家の姉娘の写真である。

家族の暮らしの一場面をあらわす写真に、「ミヤタケ一家——マンザナーの家庭」という題の写真がある。この写真には特別に注目せねばならない。詳しく描写しながら、この写真の副題「マンザナーの家庭」の意味を考えていきたい。

著名な日系人写真家だったミヤタケ一家を写したこの一枚は、正面から写すアダムズの多くの写真と違って、一家の次男と思われる少年がレンズを向いているだけで、ミヤタケも妻も長男も机に

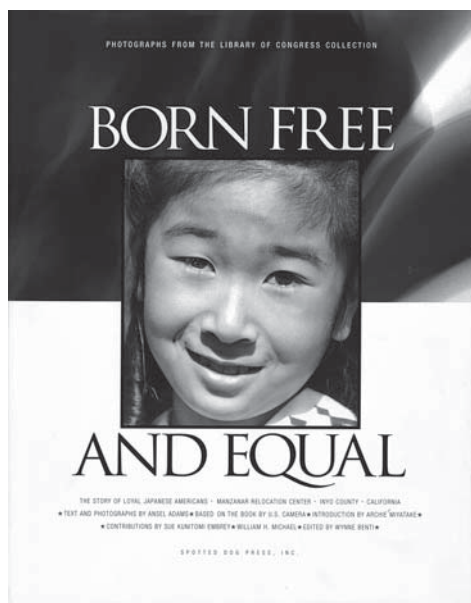


写真1 アンセル・アダムズのマンザナー記録

向かって絵を描いている少女を眺めているために後頭部から写されている。幼い少女を囲んだ家族のやさしい情景である。子供部屋のようにしつらえられたその部屋には、少女の勉強机があり、その上にはバラの造花が飾られている。二三冊立てかけられた本の表紙には、「妖精物語」という文字が読める。机の前に座ると、目の前と右横の壁にクリスマスの切り絵や、女の子のシルエット、影絵、家や動物などを描いた絵などが貼られ、にぎやかに楽しい子供の空想の世界が広がっている。子供用の壁掛け時計もある。お人形やチューダー朝の家の模型が棚に置かれ、小さなたんすの上には、男の子たち用の汽車の模型が置かれている。棚の中身を隠すように覆うのは、白い布だが裾模様とトップのフリルにおそらくは赤と白の、ギンガムチェックの布を使ったおしゃれなカーテン風の覆いで、しゃれた雰囲気を出している。少女の座る椅子の背中をクッションのように覆っているのは、おそろいのギンガムチェックの布である。子供のお絵かきを見守る両親と、かわいらしい子供たちの夢をそそるような、さまざまな小物のある部屋のイメージを、この写真は提示している。人物に「自然」な表情を求めたというアダムズが、なぜこのような「マンザナーの家庭」という題をつけた写真を撮ろうとしたのだろうか。すべての装置が人工的に映る。

父親ミヤタケと息子の二人は、厚手の上着を着たままだが、母親と少女は半袖ブラウス姿で、少女のほうは花柄ちょうちん袖のかわいらしいブラウスを着ている。窓の外は雪景色のようにも見えるがそうではない。家の中は暖かいのだろうか。それにしても男女の服装が季節的にちぐはぐなのはなぜだろうか。

「しあわせなミヤタケ一家」像を写したアダムズのもう一枚の写真がある。ミヤタケ家族の服装から判断すると、おそらく同日に撮影されたのだろう。この写真は子供部屋ではなく居間でくつろぐ一家の写真である。低いテーブルには雑誌ヴォーグやニューヨーカーが置かれ、部屋の隅には飾りのついたクリスマス・ツリーがある。ミネ・オークボが描いた、枯れ木のクリスマス・ツリーを囲む陰鬱な表情



写真2 ミヤタケ一家（アンセル・アダムズ）

の家族の絵とは対照的である。ここでもミヤタケは笑顔で、娘は恥ずかしそうに微笑んでいる。暖かな「アメリカの家庭」が出現している。イリーナ・タジマ・クリーフはこの写真を、「アメリカ文化のあらゆる表象があるべき場所に安全に置かれ、家族は自分たちの生活を成している品々に囲まれている」（Creef 29）と説明する。

ここに生み出されているのは、幸せなアメリカの家庭像である。収容所にも楽しい我が家があり、家の中にはバラの花が飾られ、女の子には金髪碧眼のお人形が、男の子には汽車のおもちゃがある。クリスマスを祝うことができる。最新号の写真雑誌を読むことができる。やさしい父

母や兄たちに囲まれて、愛情いっぱいに庇護されながら女の子は育っている。このように娘と息子のいる典型的な家族構成は、やはり三人きょうだいだった「ディックとジェイン」の家庭を思い起こさせる。

「ディックとジェイン」とは、ちょうどこの戦争当時、アメリカの大多数の小学校で使用されていた英語読本である。1930年代から60年代半ばまで、アメリカの少年少女に英語を教えた教科書であったばかりでなく、アメリカの生活様式ならびにアメリカ的価値観、アメリカの家庭の理想像を子供たちに刷り込んでいった。登場人物の母親と二人の娘は金髪碧眼、父親と息子は茶色の髪の毛で、父親は背が高い。この描写だけですでにヨーロッパ主義の美の価値基準が読み取れるだろう。

ミヤタケ一家を写した「アメリカの家庭」は、まさに「ディックとジェイン」に象徴されたアメリカ的価値観の表現である。アダムズはこの写真を次のように説明する。伝統的に日系人は清潔な民族だということを指摘し、昼間は砂嵐や泥土に汚れながらも、夜になるときれいさっぱりとして映画を見に行ったり、ダンスに興じる。「私がマンザナーを探訪したかぎり、不潔な人々に出会ったことは一度もない。こもった空気や不潔で散らかった部屋を見たことがない」(Adams 63)。バラックに入りきれないほどの家具を持ってきていても、家の中が散らかっていることはないという。「家庭はごく簡素で、特に若い夫婦は、最低限の持ち物で新生活をスタートさせている。しばしば両親と一緒にの住まいである」(Adams 63)とつけ加える。収容者たちは、「質素なホーム」というピューリタンの価値観を具現しているとアダムズは言いたいのだろうか。

美しい写真「アメリカの家庭」のどこに無理があるのだろうか。何が人工的に映るのだろうか。

かわいらしいカーテン風の覆いは、椅子の背中カバーと同じように、おしゃれな飾りではなく、何かを隠すためである。椅子をよく見ると、いかにも素人の手作りで荒削りの板を不細工に釘で打ち合わせているのが見える。机の天板は何枚かの板をはぎ合わせて作られている。壁に見える白いバックも、実は厚紙を画鋏で止めている。窓の横に立つミヤタケのそばの壁も、簡単なボードの張り合わせを太い針金を交差させて押さえている。切り絵が飾ってあった厚紙の上部には、バラックの屋根を支える梁用の木材がのぞいている。

「家庭（ホーム）」の象徴は、日本では囲炉裏や炬燵だったが、アメリカでは暖炉で、家の中心にあって家族がくつろぐ空間を生み出す。あるいはノーマン・ロックウエルの、クリスマスや感謝祭の食卓を囲んだ大家族の絵に具体的に描かれているように、食事の風景がアメリカの家族団らんの場である。

「アメリカの家庭」という副題で、収容所の家庭生活をあらわそうとしたアダムズは、困惑したにちがいない。バラック建ての個人の家には、台所もなければ食堂もない。ゆっくりとくつろいで一家で食事を楽しむことは収容所暮らしでは不可能だった。「家庭」を成り立たせるもっとも重要な営みの一つが、かれらの人生から剥奪されていた。共同食堂の前の戸外で、列を作り順番待ちをしなければならない三度の食事は、生存のためだけのものである。そこに人間を支える精神的いこいの時間はない。共同社会に住む人間にとって、もっとも重要な家族の絆を育むはずの家庭生活の一部が、かれらには許されていなかったのである。

幼女を囲む家族の後ろ向きの「肖像」は、収容所の隠蔽された部分をまさに露呈している。美しい家族の姿に惑わされずに、写真がすでに語っているものを私たちは受け止めねばならな

い。

マンザナー収容所のミヤタケ家の内部を描写しながら、19世紀の作家ストウ夫人が書いた『アンクル・トムの小屋』（1852）の描写を私は思い出していた。若い奴隷のトム一家が住む丸太小屋を、ストウ夫人は次のように創りあげる。

「アンクル・トムの小屋は小さな丸太小屋だった。（略）小屋の前にはこぎれいな花壇・菜園があり、毎夏、イチゴや木苺がなり、野菜がとれた。（略）小屋の正面は大きな赤いつる草が這い、（略）夏にはマリゴールドやペチュニアなどさまざまな一年草が咲き誇った（略）」（Stowe16-17）。
「小屋の中に入るとその一隅には、雪のように白い布団で覆われた寝台があり、そのそばにはかなり大きな絨緞があった。（略）実際この片隅はトム家の客間だった。反対側には、ずっと質素な寝台があり、あきらかに使うためのものだった。暖炉の上部の壁には宗教画が飾られ、ワシントン将軍の肖像画があった」（Stowe 17-18）。

このようにストウ夫人はアンクル・トムの一部屋の丸太小屋を、まるで数部屋もある住居のように描き出す。それは19世紀のアメリカの中産階級が理想とする住宅の模倣である。いっぽうマンザナー強制収容所のミヤタケ家の住居も、「20×25フィートのベニヤ張り、タール塗りの紙張り」の狭い空間だった（Creef 28）。

私は19世紀のアメリカ社会を、「家庭（ホーム）信仰」が支配した時代と見なしている。暖炉と白いテーブル・クロスが中産階級の象徴だったことは、同じように19世紀の作家ナサニエル・ホーソーンが、短編「ロジャー・マルヴィンの埋葬」や「ウェイクフィールド」、その他の作品で印象深く描いている。敬虔なキリスト教徒の資質をもち、若主人に教えられながら聖書の文字を一生懸命に勉強しているアンクル・トムに、ストウ夫人はアメリカ人の理想像を託している。そのトム一家が住む場所は、一部屋ばかりの丸太小屋であるにもかかわらず、その空間の一部を客間に見立て、あるいは寝室に見立てる。マンザナー強制収容所のバラック小屋に、写真家アンセル・アダムズは、ストウ夫人がそうしたように、アメリカの理想の家庭像、理想の住居を創造しようとした。だが奴隷制度のもとで、アンクル・トムがいくら理想的な住居に住もうとも、それは擬似住居であり、いくら白人の若主人が心ある人間であっても、奴隷制度における白人の主人であり、奴隷トムの人間性剥奪の状況は変わらない。日系人の強制収容もまた、人間性剥奪という点で、その精神状況は奴隷制度に類似している。

アンセル・アダムズは、正面を向いた「家族の肖像」写真を写している。「若い弁護士とその家族」という題で、居間と思われる場所で幼児の息子と若い両親の3人がレンズを向いて写っている。夫婦が誠実そうな表情を見せているにもかかわらず、何かちぐはぐな印象を受けるのはなぜだろうか。いささか寂しそうで、感情を失っているように映る若い母親のせいだろうか。

弁護士という専門職の資格を獲得した若い父親は、二世の中でもおそらく出世組で、輝く未来が開けているはずだった。2、3歳くらいに見える息子が誕生してほどなく、一家はマンザナーへ強制収容されたのだろう。すでに強制収容が始まってから1年たった1943年秋、写真が撮られた時期は、強制収容が今後どのように展開され、あるいは解決・解消されていくのか、だれもがわからないころである。政府や軍隊の中でさえ、さまざまな意見が交錯し、長期間、日系人を「拘束」しておくことの弊害や、違憲性が論じられ、しかし西海岸へ戻すことはできないという思惑などが混乱していた。いっぽう反乱も起こさず、おとなしい日系人を強制収容する

意味が、時を経るにしたがいますます曖昧になり、不明瞭になっていった。あわただしく強引に西海岸の日系人を収容してみたものの、どのように扱うべきなのか、政府は戸惑っていた。

収容所生活の写真撮ることによって職業意識を保ち続けることができた、中年を迎えていたミヤタケとちがって、正式に弁護士業を続けることができず、さらに未来のビジョンが見えない強制収容所の状況は、若い弁護士夫婦にやり場のない苛立ち、焦燥感を芽生えさせていただろう。これから、という未来の展望が、ある日、突然に断ち切れ、不条理な政治の決断を突きつけられ、らちの明かない状況に、人間は無表情にならざるを得ない。

「若い弁護士とその家族」の写真に写された部屋の様子を観察すると、夫婦が座っている椅子は、背もたれもない、素人作りのスツールである。テーブルも同様で、雑然とした雰囲気を生み出している。暖かい家族の団欒の空気は伝わってこない。伝わってくるのは空漠感であり、個性の感じられない味気ない家の内部の様子である。それはそのまま、かれらの心境を映し出しているように思えてくる。

アダムズは肖像写真を撮りながら、さまざまな職種を紹介している。元編集者、建具師、X線技師、会計士、デザイナー、溶接工、トラクター運転士、農夫など。あるいは神学・国際関係を勉強していた学生。女性の場合は看護婦。軍隊へ志願できるようになってからは、日系人兵士、従軍看護婦。

ところが第二次世界大戦前、大学卒の日系二世の男性の職域は広くなかった。工学、薬学、会計学などを大学で修めても、それぞれの専門領域の仕事につくことはほとんど不可能だった (Takaki 219)。「二世に公務員の口は現実的にはゼロだった。1940年、ロスアンジェルス市に日系人の消防夫・警察官・郵便配達夫、また公立学校教師は一人もいなかった」(Takaki 219)という事実を押さえながら、アダムズの写真を見なければならぬ。戦前の日系人は、農業従事者が三割強を占め、販売関係が二割弱だった (Fugita 43)。教師になることが不可能だったことは、モニカ・ソネの証言に明らかである (Fugita 43)。

アダムズは、「人種問題・社会問題を具体的に追求するときに、非個性化した集団は根源的要素であるが、しばしば個人を隠してしまう」(Adams 13)と述べ、個人の肖像こそが重要であると断言する。マンザナーで写されている人物像は、その主張に沿って個人の肖像が多い。多種多様な職業を代表する人々を紹介しながらアダムズは、日系人のアメリカ社会への貢献を描き出そうとしたのだろう。ところが一枚、個人の肖像写真で気になるものがある。若い看護婦の肖像写真である。「マンザナー病院の看護婦アキコ・ハマグチ」という題の、看護婦の制服を着て、看護帽を被った美しい二世の女性の肖像写真である。

マンザナー収容所には、1942年7月に病院が設置されている。アダムズのテキストによれば、ロングビーチ生まれのハマグチは、すでにロスアンジェルス・シティ・カレッジで二年間の看護予備教育を受けており、ロスアンジェルス総合病院で実習を終えている。ハマグチの夢は公衆衛生局の看護婦になることだという (Adams 73)。写真集が出版される1944年には、すでに転住をし、デトロイト市の医務局勤務になっている。

アダムズがマンザナーで写したハマグチ像は、真面目できりりと美しい若い看護婦である。アダムズはテキストに、「ハマグチはおもに人間に興味があるが、ブリッジ、テニス、乗馬、読

書も楽しむ」(Adams 73)と記し、休憩時間に看護婦室で仲間の看護婦とブリッジを楽しんでいるワンピース姿のハマグチを写している。アダムズのテキストの内容、ブリッジに興じる姿が、ことさら強調されているからだろうが、ハマグチの美しい看護婦姿が、まるで光輪(ハロー)を輝かせているように見えてくる。真正面から写しているからでもあろう。誇らしげな看護婦の徽章が襟に輝き、黒いガウン風の上着を羽織っているのは、白い看護服の効果を考えたアダムズの細工なのだろうか。黒いガウンに縁取られ、豊かな黒い髪を結び上げ、その上に載る看護帽の、白黒写真では黒く写る縁取りが、ハローのようである。かくしてハマグチは「聖なる天使」像を体現する。看護婦という職業を聖化し、アメリカの美しい未来を担う女性像にハマグチは仕立て上げられる。



写真3 看護婦ハマグチ(アンセル・アダムズ)

日系人の間でブリッジがどの程度はやっていたのだろうか。それほど人気のあるトランプ・ゲームだったのだろうか。中国系アメリカ人の中では、何といてもマージャンが人気だった。時代は下るが、中国系アメリカ人作家エイミー・タンの『ジョイ・ラック・クラブ』(1989)に、マージャンに興じる西海岸の中国人たちの様子が描かれている。「ブリッジ・テニス・乗馬」というのは、1920年代、自由を謳歌するようになった中産階級以上のアメリカの若者の、余暇の過ごしかたの定番だった。それを日系人のハマグチもすべて楽しんでいるのが、たとえ事実であったにしても、アメリカ的な若い女性像、典型的な楽しいアメリカを享受する若者像を、アダムズはことさら強調しているのではないか。アダムズはなぜハマグチの写真にこのような説明を加えたのだろうか。

もう一つ個人の肖像を挙げておこう。これもまた典型的なアメリカ的視点から撮られていると感じられるからである。

若い農夫ベンジが収穫したばかりのキャベツを両脇に抱えて、誇らしげに笑っている正面写真である。中年で筋骨隆々、体格の飛びぬけてよい白人農夫が、満面の笑みをたたえながら、スイカやかぼちゃやとうもろこしの束を両脇に抱え、あるいは収穫した作物を誇らしげに前に突き出している写真や絵を目にしたことがあるだろう。そのような体格のよ



写真4 若い農夫(アンセル・アダムズ)

い男ではないが、さわやかな青年のこの写真は、農業国アメリカの誇りを描き出している。偉大な農業国アメリカを、偉大なアメリカ人の勤勉さを誇張する、よくある構図である。アダムズはそのようなありふれた構図を踏襲する。

そしてアダムズはテキストに次のように記す。「灌がいと（略）マンザナーの人々の骨身を惜しまない労働が、大地から作物を生み出し、達成感がかれらの心を満たした」(Adams 96)。農夫ベンジは、アダムズをバラック小屋の倉庫に案内し、豊穡な作物の収穫を見せている。「かぼちゃの収穫の重みで、バラックは倒壊寸前だった。泥のついた黄金のかぼちゃが山と積まれ、床はゆがみ窪んでいた。その真ん中に立つベンジは、畑仕事のはっきりした証拠品にこれ以上ないほど誇らしげだった」(Adams 97)。

不毛で厳しい気候条件の砂漠にあるマンザナー強制収容所であっても、人々の努力する意志と労働が地の恵みをもたらす。たしかにこれほど人間にとっての喜びはない。農業に従事する日系人は多かったから、かれらはその技術と経験を生かして、不毛の地を耕作地に変え、野菜を育てた。マンザナーの農業プロジェクトは1942年3月から始まったというから、強制収容が始まるとすぐに実施されている。440 エーカーの土地に、約175人の収容者が雇われ、収穫された野菜は豊富で収容所の食堂をにぎわした。余剰作物は収容所内のピクルス工場に送られ、また処理され乾燥野菜になった。他の収容所へも送られたという(Adams 92)。

アダムズはこの写真の説明の締めくくりに、メアリー・オースティン(1868 - 1934)の言葉を引用している。「砂漠は人間に苦闘を強いるが、それには報いがある。深い呼吸、深い眠り、そして星々の交わり」(Adams 96)。

短期間であれ収容所を見学し、実態を見ていたはずのアダムズが、ここまでセンチメンタルになれるのだろうか。苦闘を強いる砂漠の暮らしを肯定し、砂漠にもすばらしいことはあると説く。そのようにしか読めない文章である。

作物を両脇に抱えた若い農夫の図が、アメリカの豊かさを誇る既成の写真の思い起こさせたが、もう一つ、マンザナーの日常をとらえたようであり、アダムズの作為が目立つ「作品」がある。「公報局はマンザナー・フリー・プレス新聞を刊行する」というキャプションのついた写真である。

二十代から三十代ぐらいの男三人が、「フリー・プレス」の看板が掲げられたバラックの前に立ち、二人は新聞を読み、一人はポケットに手を突っこんだまま立っている。あたかも自然な様子をしている三人だが、このような情景こそ、アメリカの田舎町の典型的な一コマというのだろう。世の中で何が起きているのか、それを知らせる新聞を読んでいるのは男たちである。もちろん女たちではない。この写真は、ありふれた街角の一風景を思い出させるだろう。靴を磨かせ新聞を読む男、あるいは床屋の前にたむろした男たちが新聞を読んでいる。新聞を持たないもの、読むのが不得手なものたちは、読んで聞かせてもらっている。

18世紀の独立戦争を時代背景にした、ワシントン・アーヴィングの中篇小説「リップ・ヴァン・ウィンクル」の中にこのような一場面があった。山の中で眠りこけてしまった男が、20年後に故郷の村へ帰ってくると、世の中は変わり、英領植民地アメリカは共和国アメリカになっていた。新聞が田舎の村まで浸透し、世の中の動きを伝えてくる。マンザナー強制収容所もまた、外の世界とのつながりをマンザナー・フリー・プレスが伝えているようである。そのようなアメリ

カのスモール・タウンのありふれた情景，という印象をこの写真は与える。男たちの向こうに立ち並ぶバラック群が，普通の町ではないことを十分に示してはいるのだが。

アダムズのテキストによれば，これは意図された情景ではなく，たまたま出くわしたことになる。「晴れて冷え冷えとする秋の朝早く，ロイ・タケノとユイイチ・ヒラタとスタッフが，陽光を浴びながら公報局の前に立ち，到着したばかりのロスアンジェルス新聞を読んでいた。印象的な瞬間だった。清澄な空気，永遠に聳え立つ山，仮設小屋，創造力を備えた人間が，かれらが所属する権利のある外の世界のニュースや論説をむさぼるように読んでいる」(Adams 64)。

アダムズは，収容所に閉じ込められている若い二世への共感を持ってこの文章を書いているのだろう。だが続いて引用するのは，被写体になったタケノが，マンザナー・フリー・プレス紙に掲載した「アメリカへ。勝利の新年を」という題の論説である。1944年1月1日付で，タケノは次のように書く。

「われわれは世界の他の国々で，何百万人という罪のない人々の生命が，強制退去や，戦争協力を惜しまない市民の保護ができない政府のせいで，犠牲になっているのを知っている。ここ戦時転住センターは，われわれに暫定的避難所を提供してくれた。われわれはアメリカにおいて負債を負ったが，今，われわれは新しい精神で自分たち自身を新たに確立するために準備を整えている。(略)重要なことは，強制退去させられた市民たちが，アメリカ社会にアメリカ人として受け入れられるのだという自信を持つことである」(Adams 65)。

そしてタケノは次のように締めくくる。「われわれの眼はふたたびはっきりものを見る。われわれの心は，ふたたび強くなっている。深い理解と堅固な確信をもって，アメリカ人としてわれわれは，あなたがたの，そしてわれわれの勝利がこの国のものとなる新しい年を迎える」(Adams 66)。

これは二世タケノのアメリカへの忠誠宣言であるとともに，日系アメリカ人へ，アメリカ人としての誇りを持つよう鼓舞している文章である。収容所発行の新聞であり，さまざまな制約があったことは容易に推測できる。それゆえタケノの論説を批判することはできないが，アダムズが，「この論説は多くの人々に読まれ，熱狂的賛同を得たので全文を引用しよう」(Adams 64)として，テキストに全文を引用したことの意味は十分に考えねばならない。全文引用は，アメリカ社会一般の日系人への誤解を解き，よりよき理解を促進したいというアダムズの善意と解釈すべきなのか。引用では省略したが，タケノは前半で，アメリカ社会への感謝の念を，ことさら強調している。強制収容によって日系人の子供たちや老人，病人を保護してくれたことを，「アメリカの人々へ感謝する」(Adams 65)と記しているのである。

7.

いったいアダムズはマンザナーの写真を記録し，そのテキストによって何を訴えようとしていたのか。

アダムズはテキストの結論で，「アメリカはわれわれを庇護してくれる。アメリカは山々のように堅固で，大洋や空のように揺らぐことなく永遠である！」(Adams 116)と語っている。ア

アメリカという国が、山や海や空にとえられ、大自然のように永遠不変の力の源であると一般的に信じられているという。シエラ・ネヴァダ山脈のアメリカの大自然を撮り続けてきたアダムズは、自然が人間へ及ぼす力を信じていた。とりわけアメリカの大自然が、そこに住む人々へ与える力のすばらしさを信じていた。雄大な風景をレンズでとらえながら、「自然の景色に備わる、人間の感情や精神の反応を引き起こす資質」(Adams 13)を提示しようとしていたとアダムズは述べている。

アダムズが、マンザナー撮影の翌年、1944年8月に記した序文には、「カリフォルニア州マンザナーにて」という場所が明記されている。この序文でアダムズは、戦争という「緊張と悲しみ」(Adams 13)の年月において、「これまでになく山々の荘厳さ、美しさ、静けさ」(Adams 13)が私たちにとって意味を持っていると、ふたたびアメリカの自然を礼讃する。そしてマンザナー収容所の撮影においてカメラの主要な対象は人間であり、その生の営みであるが、人間に与える「風景の偉大なる影響」(Adams 13)を記録しようとしたのであり、「この写真集は土地を強調している」(Adams 13)とアダムズはつけ加えている。

その主張を証明するかのようには、アダムズにしては例外的に人々を写し出したマンザナー写真集だが、その中でもとりわけ自然と人間の絆が強調されている写真がある。

本書の見開き二頁に掲載された「ウィリアムスン山を背景にしたマンザナー北部農場」こそ、アダムズがマンザナー写真群の中でもっとも記録したかった写真ではないか。写真の上部3分の1を雪で覆われた山々の雄姿が占め、下部3分の2は、整然とみごとに耕された畝が波打つ大農場である。そこに2, 30人の人々がそれぞれの姿勢で作物の手入れをし、選り分け、植え込み、箱に入れる作業に精を出している。遠くに見える一台のトラックは、収穫物あるいは取り除かれた雑草を運ぶためのものだろうか。



写真5 北側の畑（アンセル・アダムズ）

この写真から、マンザナー強制収容所の人々の「現実」を見ることは不可能である。有刺鉄線も監視塔もバラックもない写真からは、雄大な山々のふもとで自然の恵みを受けとめている人々の姿しか伝わってこない。写真に写る人々が強制収容され、この不毛の土地に連れてこられ、選択の余地なくこの場所で、決められた作物を育てていることは伝わってこない。

それでもアダムズは、美しく雄大な山並みをすぐそばに見ながら、農作業にたずさわることの幸せをあらわしているというのだろうか。大自然の恵みに「アメリカの農夫」の喜びがあると語っている写真なのだろうか。

アダムズはこの地域について次のように描写している。「地図や測量によって勝手な領域が決

定されるが、この谷間の精神（霊）は、そのような限界事項によって抑え込まれはしない。西に何百マイルにわたって高くそびえるシエラ・ネヴァダの巨壁の力を感じる。アメリカ大陸の最高の頂上を支えるすばらしく堅固な山脈」（Adams 31）。その山並みの雄大さを目の前にしながら、日系人が農作業に精を出している姿を見開きで見る私たちは、大自然に抱かれた人間の、小さな存在をことさらに意識させられる。そしてたしかに美しい山並みが、小さな人間の集合を堂々と守ってくれていると感じさせられる。もはやそこが強制収容所だということは忘れ去られる。点在する働く農夫たちの写真には、17世紀に大西洋を渡ってアメリカ植民地を建設し、森林を伐採し、開墾地を作り上げていった「アメリカの農夫」の姿を見る。西部の雄大な山脈のふもとへ到達した「アメリカの農夫」の歴史が、そこには刻まれている。

アンセル・アダムズは、「集団より個人が最重要であると感じた。ある意味では、各個人が集団をきわめてはっきりと露呈する」（Adams 121）と述べていた。これまで個人よりは自然を写し続けていたアダムズが、個人の肖像を記録し、その中に集団を見ようとした。だが「ウィリアムスン山を背景にしたマンザナー北部農場」は、集団を映し出している稀有なマンザナーの記録である。それでも集団を真正面から写したのではなく、手前の人間より遠景の、けれども巨大な山々が、どうしてもこの写真の主役であるように思える。農夫の集団といえども、かれらは点在しているだけで、その存在が集団として強調されているのではない。点在する農夫たちより、自然の山々がこちら側へ向けて発射する力が感じ取られる。

マンザナーの写真をめぐる、個人と集団という観点からアダムズとミヤタケを比較せねばならない。アダムズは、個人を集団より重要だと考え、肖像写真を残したが、その友人でありプロの写真家だった日系のトーヨー・ミヤタケは、かえって集団を撮り続けている。二人の違いは歴然としている。「パールハーバー」以前のミヤタケは、ロスアンジェルスのリトル・トーキョーでフォト・スタジオを開いていた。個人の肖像写真や結婚式の記念写真などを撮っていたが、本領はダンサーの芸術写真を撮ることにあった。いわば一人の人間の「芸術性」を写真で表現すること、それがミヤタケの写真へ対する強い情熱であった。ミヤタケと親しかったダンサーの一人、バーバラ・ベリーは、「写真のドガ」（宮武 124）とミヤタケを呼び、踊り子を描き続けた画家にたとえている。1926年、ミヤタケはロンドンで開催された万国写真展に出品し、入賞するほど世界でも評価されていた（宮武 7）。

ところがマンザナー強制収容所へ入った後のミヤタケは、集合写真を多く撮影する。個人の表情より、集団になったときのかれらの全体としての姿を記録する。「パールハーバー」以前の写真と比較しながら、その変化を読み、ミヤタケのマンザナー体験の意味を推察することができるのではないか。

アダムズは集団より個人へ視点を集中させたというが、ミヤタケはその正反対で、個人より集団へ視点を向けた。群衆ではなく、ほとんどがレンズを向いて整然と並んでいる、いわゆる集合写真、記念写真が多い。「マンザナー・ハイスクール 1943 年度卒業記念」や、「ハイスクールの合唱団」、「歯科医とインターン」、「鶏卵係」、「三世代の家族写真」、「野球チーム」、「新年会の大講堂」などすべてそうである。「一見花見風景」というキャプションのついた写真すら、花の宴の乱暴狼藉、混乱状態などはどこにも見られない。酒を飲み夕涼みをしている男たちが、大きな木のもとに集まり、敷かれたシートの上に整然と居並んでいる。床屋、美容院、魚屋の

写真ですら、写された店屋の者や客たちが整然と並び、こちらを向いている。芸術写真を撮っていたミヤタケが、このような整然と並んだ人々の集合写真を撮るにいたったのには、どのような心の変化があったのだろうか。ミヤタケはマンザナーを、いかに記録しようと考えていたのか。

戦後、ミヤタケはマンザナーの記憶をあまり話さなかったというが、強制収容がさほどつらくはなかった、どうにか過ごせたと話していたという。マンザナー強制収容所長ラルフ・メリットの特別のお目こぼしで、写真を撮ることが許されたからだろうか。お目こぼしをされたのは、著名な写真家エドワード・ウエストン（1886-1958）が、日本人の弟子ミヤタケを心配して、所長にそれとなく「特別待遇」を頼んでいたという背景があったようだ。それでも強制収容によって、「写真のドガ」であることを抑えこまねばならなかったミヤタケが、写真家としての自分のありかたに苦悩しなかったはずはない。

芸術写真を撮ることを放棄したミヤタケは、整然と並ぶ集団写真を撮ることに、強制収容の意味を込めていたのではないか。白人のアンセル・アダムズとは違って、強制収容所のミヤタケはもはや個人の写真家ではなく、日系人の一人にすぎない。かれら日系人はプライベートがなく、個人を失い、集団にならざるをえなかった。共同食堂での集団での三度の食事が、個人の家庭生活の破壊を象徴的に示している。

どこでも行列を作らなければならなかった。食事のときも、診察を受けるときも、洗濯をするときも、長い列に並び待つことが強いられた。自分の家というには個性のないバラック小屋、他人との同居がマンザナー体験の意味だった。ミネ・オークボは、『市民 13660 号』で、個性の喪失をまた別の形で記録している。スケッチ画に描かれているのは、娘も中年女性も老婆もまったく同じ柄の同じデザインのブラウスを着ている図である。「だれもかれもが、皆にたりよったりの服を着ていた。それも、カタログ注文と GI 制服のせいだった」と説明文に記す。個性の喪失、個人主義のない社会が強制収容所生活の実態なのである。

ミヤタケやラング、アダムズが写すことができなかったのは、「収容所で日々起きる住環境の不都合や不具合、収容の初期に続いて起きた不穏な出来事、抗議」（Creff66）であった。それらは視覚化されていない。またトイレや溝の悪臭や猛烈な蚊の襲来があった。砂嵐のほかに収容所の住民を悩ませる要素はさまざまにあり、オークボはその様子をスケッチしている。下水処理システムが不整備で悪臭に悩まされながら、トイレを使用する。そのトイレにはドアがついていない。夏になると蚊のみならずありとあらゆる小さな虫が、網戸のない窓から入ってくる。窓を閉めれば猛烈な暑さに苦しめられる。

アンセル・アダムズの「ミヤタケ一家」の幸せ家族像が、人工的・偽善的に映るのは、収容所にいることじたいが家族生活の強制放棄であることを、写真家が意図的に忘却しているからである。ドロシー・ラングの写した「祖父と孫たち」の杖を手に口をへの字に結んでいる祖父像に、多くの人々が一世の威厳を認めたようだが、収容所生活で失われたものはまさに一世の威厳だった。家庭生活が壊され、一番重要な食事の時間が家族の団欒の場でなくなった。集団生活の中で食事は共同食堂で摂られ、家庭の中心人物だった祖父・父親の存在が希薄になった。家族を導き、家庭生活を営む者、さまざまな決断をする者としての父親の役割は否定された。ラングの撮ったこの写真には、「祖父と孫たちが強制退去のバスを待っている。祖父は染物・洗

濯業を営んでいた。家族の単位は強制退去から戦時転住センターへ移ってからでも維持された」(Conrat 115)という説明文がついている。だがじっさいは家族の単位は番号化され、人間性は剥奪されたのであり、家族を強調するこの説明文は白々しく響く。

ミヤタケ一家の写真が残っているのは、ミヤタケがアダムズへ友人として協力したからだろう。有刺鉄線の中で個人がまったく否定されるときに、ミヤタケが記録しようとしたのは、もはや個人の芸術写真ではなく、日系人の集団だった。集団としての日常を写そうとした。アダムズが撮影した家族像が、収容所生活の一コマとして意味を成すとミヤタケは考えたのだろう。

8.

もう一人のマンザナーの記録者であったドロシー・ラング(1895-1965)は、1942年3月18日、WRA(戦時転住局)が設立されると、公式カメラマンに任命され、強制退去・転住を記録することになる。3月22日に日系人の招集が始まると同時に、ラングは記録写真を撮り始めている。1930年代、FSA(農民安全局)によって不況の農村地帯のドキュメンタリーを依頼され、その衝撃的にリアリスティックな写真でよく知られていたラングは、アンセル・アダムズとはまったく異なる写真家だった。アダムズ自身、おそらくラングを意識して、「社会派の写真は、必要以上に人間味や想像性に欠ける」(Adams 121)と批判し、マンザナーを撮るにあたって、自分はそのようなリアリズムが本来の目的を失うことは避けたいと述べている。

ドキュメンタリーとは何か、という定義が明確でない時代に、FSA(農民安全局)でラングと同僚だった写真家のウォーカー・エヴァンズは、ドキュメンタリーを、「触られていない現実をさらのまま記録すること」と定義している。だがそのように「客観的」になれるはずはない。レンズが写すのではなく、あくまでも写真家が介在して写真は撮られる。そこに写真家の個性、写真家の思想が入り込んでくる。ラングは、アダムズのような写真家の批判に答えるように、「ドキュメンタリーの写真家は社会改革家ではない。社会改革がその目的ではない」(Gordon and Okihiro 12)と反論する。かれらの責任は記録を残すことにありと主張し、それでもおそらく周囲からの、記録写真家は芸術家ではない、「プロパガンディスト」だ、という非難に答えて次のように開き直っている。

「何だってプロパガンダよ。何を信じるかということだ。(略)そんなことないって言えるかしら。何であってもより深く信じ、より強い信念を持てば、プロパガンディストになるのよ。確信、プロパガンダ、信念、何でもいいけれど、悪い言葉だと思ったことはないわ」(Gordon and Okihiro 12)。

プロの写真家は、「写真を撮るのではなく作るのだ」(Gordon and Okihiro 12)という意見が強いなかで、ラングは作ることを可能な限り避けようとした記録写真家だった。ラングは相手に自分自身を「見えない」ようにすることができた、とラングの周囲の人々は言う(Gordon and Okihiro 18)。相手に「気がつかれないように、少なくとも無視される」(Gordon and Okihiro 18)ようにすることができたという。そのために被写体は無意識の状態で見事に納まることになる。構図からみれば、ラングの写真は、ミヤタケやアダムズの写真と比較して、雑然とした印象を受けるだろう。猥雑だとさえいえる。だが日系人に強制収容の行政命令が出て、じっ

さいに自宅を放棄し、転住所へ短時日に集合せねばならなかった現実的時間を考えると、猥雑な行動しかできなかつただろう。家財を処理し、手に持てる範囲という規則に合う持ち物を選択し、すばやく準備せねばならぬかれら日系人の心中は、まさに混乱のきわみだった。ラングの写真はそれをそのまま記録している。

ラングは集団の写真であつても、ミヤタケのように整然と並ばせて正面を向かせて記念撮影をすることはない。個人を写してもアダムズのようにレンズを直視させ、にっこり笑うポーズを取らせることはない。スタジオ内で不自然な状況で写真を撮ることはほとんどなかった。できるなら外の自然光で、フラッシュをたかず、自然にたむろする人々の群れを撮り、雑然と集まっている様子をそのままに写



写真6 マンザナー強制収容所（ドロシー・ラング）

し、残そうとしている。外光を頼りに撮られた写真は、輪郭を明瞭に映し出すことができず、かならずしも「美しい」写真ではない。だがリアリティに接近するその姿勢こそ、「日系人の強制収容」という被写体の場合には重要だったのではないだろうか。美しく写そうとする作為はにせの行為になる。

ラングの写した雑然とした群衆は特にレンズを見つめてはいない。多くは写真家のほうを向かず、四方八方に視線を向けている。後ろ向きの人々が多い。たまたまレンズの方を向いた者もある。このような乱雑な方向性が、アセンブリー・センターへの移動が始まった初期の、混乱状態を表現している。あるいは例外的にフラッシュを使用し、バラックの内部にいる父娘を撮った写真がある。老いた父親はレンズの方を向いていない。他の写真に比べると、父親の姿は平坦で動きがないが、それでも「被写体の思いあるいは内なる緊張感があらわれ、意気消沈した様子」（Gordon and Okihiro 24）が、ひたすらあらわれている。不思議なことに老父の横顔だけで、重く深刻な雰囲気あたりを支配し、強制収容の意味を十分に伝える情景になっている。

ラングの伝記を書いたリンダ・ゴードンの分析によれば、ラングの物語性は、「強制収容のプロセスを通して個人を追い続けること」（Gordon and Okihiro 27）だったという。たとえばカリフォルニア州マウンテンビューのシブヤ一家を代表させ、家族のそれぞれを紹介し、菊栽培で成功したにこやかなシブヤを畑の中に写し出す。よく手入れの行き届いた畑、瀟洒な自宅と庭など、日系アメリカ人のアメリカ社会における歴史と貢献を写真に語らせている。

ラングの強制収容写真で印象的なのは、日系人のこれまでの歴史を閉じていく瞬間を写した写真群である。「退去の日の朝、納屋の扉を釘付けにする」、「寺院の玄関に鍵をかける仏僧の手」、「退去に備え店舗を板張りにする」、「倉庫に積まれた退去者の荷物」「貸店舗の張り紙のあるレストラン」など、正面を向く人間がいなければ、「仏僧」の写真では腕の数珠がクローズアッ

プされているばかりである。貸店舗という小さな張り紙の下で、「菊水」という金文字が輝くレストランの扉の写真に、人間は写っていないくとも、日系人所有者が営々と築き上げてきた歴史が感じ取られる。それがすべて凍結され、終焉してしまった情景をラングはみごとに写し出している。「洗濯日、退去の40時間前」というキャプションの、軽やかに風に吹かれる着物二枚の写真では、人間の姿が見られない。退去が迫っているにもかかわらず、洗濯日の日常が営まれ、あたかも何も変わらない、平穩に時間が過ぎているようである。だが風にはためく洗濯物が、あまりにも日常的であるために、かえって人生のはかなさや、着物を着る人間の空虚な心が、この写真を見る者に伝わってくる。洗濯紐にクリップで止められた着物を着る主体はどこへいったのか。これからどこへ行くのか。人間が映し出されていないために、よけいに人間の命が強く感じられる。

とりわけ印象的なのは、集合所へやって来た日系人家族が名前を剥奪され、荷札のように番号札を胸につけている写真である。ユダヤ人が「ダビデの星」を胸につけることを強要されたように、かれらのアイデンティティはこの番号であらわされ、係官は人間の顔を確認するのではなく、番号を確認する。ラングはその瞬間を撮っている。1942年4月6日の「札を付けられ、リストと照合される」という説明文が付けられた写真は、帽子を被り外套を着た一世を頭上から撮ったもので、老人の姿と係官の大きな手が見えるだけである。個人の顔を確認するのではなく、番号を確かめることがかれらの仕事だった。

ラングの「強制退去のバスを待つ祖父と孫たち」という一世と三世の男の子二人を写した前述の写真は、しばしば複製され引用されている。三人ともに上着の襟に番号札をつけ、長くたらしめている。服装の黒々しさを背景に札の白さが異様に強調される。三人の顔は無表情ともいえる。この写真を見た多くの人々が、「祖父の顔に威厳を見出します。けれども私はもっと別の感情を読み取っています。痛みです」(Creaf 56)と孫の男の子の一人ジェリー・アソは後に語っている。また別の写真家リー・ラッセルは、ロスアンジェルスのレストラン駐車場に集まって来た日系人の集団が、マンザナー行きの特別列車に乗ろうとしているところを写している。娘の手を引いた母親は、黒いオーバーの襟に番号札を付けている。子供たちもそれぞれ番号札を付けて異様な印象を与える。かれらは、「パイオニア・コミュニティへ行くのだと伝えられ、収容者たちは仕事着、長靴、缶詰などを持参した。まるで『強要されたキャンプ生活』のようだった」とキャプションにある(Wehrey 40)。「パイオニア・コミュニティ」については後述するが、強制収容をあいまいにするために取られた宣伝工作である。



写真7 祖父と孫(ドロシー・ラング)

WRAによって正式に雇われたラングの強制収容の記録は、収容の前史を映し出しているために、他の二人の写真家とはまったく異なる記録になっている。ミヤタケの場合は、マンザナー

強制収容所が開設された後の記録であり、アダムズの写真は、1943年秋の記録である。ラングの写真を通して私たちは、強制収容の始まりから、その真実により接近することができる。

アダムズもラングも、マンザナー強制収容所を撮影する許可を正式に得ていたとはいえ、規制がなかったのではない。強制収容所が軍事施設であることを示す対象物の撮影は禁止された。有刺鉄線、監視塔を写すことはできなかった。ミヤタケは最後の年に収容所長メリットによって正式な記録係に任命されるが、それまではいわば「こっそり」写し続けている。ミヤタケは内部者であり、「こっそり」と監視塔や有刺鉄線を写した。この写真は重要な記録になっている。

そのうちの一つ、遠景に監視塔があり、三人の日系少年が有刺鉄線に手を掛けている「有刺鉄線の向こうの少年たち」は、今ではよく知られているマンザナーの記録である。ところがよく見ると、三人は有刺鉄線の外側にいる。すなわち収容所の外にいて内側を見ているところをミヤタケが内側から撮影している。だがもちろん、普通の目には有刺鉄線の外へ出られない子供たちのうつろな視線に、閉じ込められた人間の心が表現されている写真と解釈されている。



写真8 マンザナーの少年（トーヨー・ミヤタケ）

子供たちを外側へ置くことによって、監視塔との距離が近くなるのだが、それより遠景の山々と荒涼とした背景が、強制収容所の空気を伝える効果を高めている。有刺鉄線が障害になって外の世界から男の子たちは突き放されている。かれらに明日はあるのだろうか。有刺鉄線の向こうへ出て行く未来はやって来るのだろうか。監視塔の存在が厳しく見る者に突きつけられる。ところが、じっさいは男の子たちの視線の向こうには、収容所があり、かれらはそこへ明るい未来を見ているのではない。意図的な作為とじっさいに写真だけを見て読み取り、感じ取る者との間の逆説を、ミヤタケはどのように意識したのだろうか。

ジャズミン・アリンダーは、ミヤタケのこの作為を高く評価する。「自然なままの悲しみや期待のあらわれではなく、その表情は意図的に引き出された」のだが、ミヤタケの写真が効果を求めて仕込まれていることが、強制収容の不法性の象徴、歴史的記録としての重要性を損ねることはない、と主張する。かえって写真家の意図をもって完成された写真は、日系人が自分たち自身を表現する戦略として取られたのであると（Alinder 92）。

ミヤタケはなぜこのような構図にしたのか。男の子たちの決してうつろではないが、有刺鉄線という現状を前にした無表情が、独特の効果を生み出している。三者三様の心の状況が、一見、表情のないそれぞれの少年の顔の背後にたしかに存在することが読み取れ、見る者に不思議な印象を刻みつける。子供なりに「しかたがない」と思っている、人生に対する柔軟な姿勢と言えるだろうか。

ジャズミン・アリンダーは、ミヤタケが外へ出なかったのは、子供たちのほうが大人より危険が少なかったからだろうと推測している (Alinder 92)。だがミヤタケが外側へ出て、監視員のいる監視塔を間近から写した一枚の写真が残っているのだから、それは理由にならない。背景がバラック小屋なのと、じっさいに残っている写真のように、監視塔と白い雪を被った山脈であるのとどちらが、少年たちの気持ちの真実により近くなるのだろうか。監視塔を入れつつバラックを背景に少年たちを撮影することは可能だっただろう。バラックではなく白い山を入れることを選んだミヤタケは、そこにアンセル・アダムズと同じようなアメリカの自然を取り込みたいと思ったのだろうか。アメリカの自然と子供たちの未来を重ねようとしたのだろうか。

マンザナー強制収容所には、管制塔が八つ建設された。1942年11月には、すべての管制塔が機能し、メリット所長の命令で夜になると強力なサーチライトが所内を照らし続けた。「地域住民の安心を確保するため」(Wehrey 58)であったというが、その発想は収容された日系人を「犯罪者」と見ていることである。有刺鉄線に囲まれ、夜になるとサーチライトが照らし続けられる生活が尋常であったはずがない。もっとも約二年後の1943年12月、監視塔からの監視は停止される。おそらく人員削減のためだったのだろうが、日系人は従順で脱走の心配はなく、監視する必要性がなかったからにちがいない。

9.

アダムズやラングに、監視塔や有刺鉄線を写した写真は残っていないが、それでは三人の写真家が写し出さなかった強制収容所の実態はどのようなものだったのか。

ロスアンジェルス生れの帰米二世カール・ヨネダが『マンザナー強制収容所日記』(1988)を残している。「真珠湾開戦日から私が志願兵として入隊するまでの、マンザナー強制収容所内での日々を、毎日砂塵に悩まされながら綴った」と序文でヨネダは書いているが、その日記を参考にしながら、マンザナー強制収容所生活の写真に残らなかった側面を記述していきたい。さらに二世の画家ミネ・オークボは、後に『市民13660号』として刊行されるスケッチ集で、オークボが収容されたトパーズ強制収容所の記録を残している。すでにカリフォルニア大学パークレー校で美術の修士号を取得していたオークボは、収容所で絵画教室を開くことになるが、強制立ち退きにより集合したタンフォーラン集合所やトパーズ強制収容所の様子をスケッチしている。最初の日からキャンプのあらゆる場所に出かけて行き、スケッチしたと後になって述べている。「いたるところに口に出されない苦悶と悲しみがあつた。それに笑い飛ばす力も。すべてが狂気の沙汰だった」(オークボ 46-49)。この描写はあらゆる収容所の日系人の心理を言い当てているだろう。

1941年12月7日、「パールハーバー」の衝撃は、日本人社会に向かって逆襲の嵐を巻き起こした。日英語新聞「同胞」のサンフランシスコ支局長だったヨネダは、新聞社として立場を明瞭にせねばならないと考え、大統領に打電する。「同胞」の読者は、と言っても150人ほどののだが、「米国政府への協力」を表明し、「日系市民および在留日本人はあくまでも米政府を守り、日本軍部とドイツのファシズムに対して戦う」(ヨネダ 13)ことを宣言する。にもかかわらずヨネダは、翌12月8日、FBIに連行され、移民局拘留所へ入れられる。そこにはすでに「知り合

いの日本人 50 余名」（ヨネダ 14）がいた。連邦政府の行動は迅速で、メディア関係者、組織指導者、スパイ容疑者を明白な逮捕状もなく拘束した。翌日にはスパイ容疑が晴れて解放されるが、おそらくヨネダの白人弁護士への働きによるのだろう。

一世は外国人であり、アメリカ市民権獲得は法的に不可能だった。「パールハーバー」以後、日本人であることでスパイの嫌疑をかけられることを恐れた一世は、県人会や宗教団体、婦米青年組織にアメリカ合衆国への忠誠を表明するよう呼びかけ、「市民防衛団参加、徴兵再登録、米国愛国公債購入、赤十字献金」を積極的に行うように奨励した。排日の気運が高まるのを防ぐために、このような努力がなされたにもかかわらず、「ジャップ」への風当たりは日々、強まっていく。

そして大統領は強制立ち退きの行政命令を枢軸国のうち日系人に対してのみ徹底的に実施することになる。ヨネダは行政命令を決定的と見なし、立ち退きに従うことを陸軍当局者へ申し出るように、JACLの城戸会長とマサオカ書記長へ進言している。「奥地に建設されるキャンプには建築労働者が必要」であり、経験のある日本人失業者を「普通の労働条件」で雇うように頼むという主旨だった（ヨネダ 56）。ミネ・オークボの『市民 13660 号』によると、最初、立ち退きは自主的なもので、日系人は特定された地域から、自主的に立退くようにという命令だった。ところが、「1942 年 3 月 27 日、ついに自主的立ち退き令は破棄され、軍隊が乗り出してきて、強制による、整然とした否認なしの立ち退きをやりだした」（オークボ 11）。ヨネダがキャンプへ移住するために登録したのは、まだ自主的立ち退きだった時期である。

政府は強制収容所であることを隠蔽するために、「パイオニア・コミュニティ」建設という婉曲表現をした。日系人ヴォランティアを募り、収容所建設に当たらせている。カール・ヨネダもヴォランティアの一人になる。1942 年 3 月下旬に撮影された、ヴォランティアの車列の写真が残っている。それには「アメリカン・ジャパニーズのパイオニアを乗せたキャラバンが砂漠を横切る。1942 年 3 月下旬、ヴォランティアの一団が、軍隊のジープに同道され、カリフォルニア州東部ローン・パインの近くにあるマンザナーへ、受け入れセンター（後に転住所）建設のために向かっている。センターでは何千人規模の強制退去者を受け入れる」というキャプションがついている（Girdner and Loftis 頁記述なし）。

一般人にはパイオニア暮らしにふさわしい服装で出頭するようという指示があった。OWI（戦時情報局）は、宣伝映画「日本人の転住」を作り、WRA のミルトン・アイゼンハワー局長は、西海岸の日系人を転住させねばならないが、そのパイオニア・コミュニティは安全な場所であること、仕事の機会が与えられること、居住空間の広いこと、したがって日本人はしあわせに暮らすことができる場所であると説明した（Flyer 85）。連邦政府の所有地に建設されるパイオニア・タウンは、戦争貢献の一環であり、新しい開拓地に日系人労働力が必要であるという論理で、日系人のヴォランティア登録が勧められる。ヨネダは登録のためにカトリック教会へいくが、その神父が次のように話したという。

カリフォルニア州シエラ山脈の麓のオーエンズ平原に、6,000 エーカーの共同大農園を設立するために、陸軍はキャンプを建築中だが、大工、左官、ペンキ屋などの経験者を必要としている。賃金は外部と同じで、やがて一万人を収容する。キャンプには、教会・学校・孤児院・病院・商店が作られる予定で、農園や商売で、住人は全員が仕事に就くことができる。

失業者のいない、いわば王道楽土のイメージを植えつけようとした。この話を日系社会はどこまで信じたのか。ヨネダは「よい話で早く行きたい」（ヨネダ 66）と日記に記しているが、どこまでが本心だったのだろう。いっぽう、宣伝映画「日本人の転住」は、強制収容所近辺、および一般のアメリカ人に、敵国外国人日本人の移住を納得させる目的があったが、この映画を見た白人たちは、「日本人はパイオニアとして西部の土地を開拓するこの新しい機会を喜んでおり、かれらを遠隔地に隔離しておくことがすべてのアメリカ人にとって安全なことである」と確信したという（Fryer 90）。

『言葉を越えて——アメリカの強制収容所表象』（1987）の第四章を書いたりリ・ササキはその章題を「パイオニア・コミュニティ」としている。それだけ「パイオニア」という婉曲表現が浸透していた証拠である。コロラド州アマチ強制収容所へ送られたササキは、そこが王道楽土ではなく、「砂と砂嵐、回転草」しかない荒涼とした土地であることを知り愕然とした（Gesensway 45）。

1942年3月23日、サンタフェ駐車場で汽車に乗せられたヨネダは、ロスアンジェルスから北東へ240マイル離れたマンザナーへ向かう。だがすぐに遅い汽車の運行に疲労を覚え、汽車のなかでは、「マンザナーには毒蛇がいて人間の住むところではない、インディアンに攻撃される、水は泥水しかない」（ヨネダ 70）など悲観的な噂に悩まされている。夜中にマンザナーに到着すると、バラックには窓もなく寒風が吹き込み、わらを入れたマットレスを敷き、陸軍の毛布二枚を被り着の身着のまま寝ることを余儀なくされる。翌朝、水栓が凍結し顔は洗えず、トイレもまだ設置されていない。「広大なキャンプの周囲には鉄条網が張り巡らされ、前方と後方に四階建ての高さに等しい監視塔があり、米兵が機関銃とサーチライトを備えて私たちを見下ろしている」という光景に、「強制収容所とはこんなものか」（ヨネダ 72）とヨネダは感じる。パイオニア・タウン建設という呼びかけは、じっさいは強制収容となんら変わらないということを、そのときヨネダは十分に認識したのだろうか。

二日もたたないうちに、皆と同じように「マンザナー下痢」にかかったとヨネダは書いている（ヨネダ 75）。健康な男ですらそうなのだから、病弱な人間にとって、強制移住が及ぼした身体への影響は計り知れない。じっさい、一週間後にやって来たヨネダの三歳の息子はアレルギー気味だったが、砂嵐にやられ、激しく咳をして呼吸困難になり苦しむ。このような子供たちは一人や二人ではなかつたろう。咳に苦しむ息子の様子がヨネダの日記に毎日のように綴られている（ヨネダ 90 - 91）。

風と砂嵐のひどさは耐えがたかった。床は砂だらけ、靴の中にも砂がいっぱい。「砂を食いに来たようなものだ。道理でインディアンが逃げていったはずだ」と仲間の男が冗談交じりにののしった（ヨネダ 76）。5月の日記には三日間、砂嵐が続いた様子が記され、「壁のすき間から砂ほこりが入り込み、朝と昼と晩にホースをつないで床の砂を洗い流す」（ヨネダ 117）というほどだった。臨月の女性まで強制退去に応じなければならなかった。ヨネダの日記には、4月17日づけで、「昨晚、キャンプ最初の男児ベビー生る」（ヨネダ 90）の記述がある。

ヨネダは収容された日系人の、共同生活で生じる問題解決のために尽力している。4月24日には、最初の地区代表者（ブロックリーダー）会議を開いている。その任務は、「デモクラシーを守るために枢軸国と闘っていることを念頭におき、キャンプの円満な運営も戦争政策に協力

するものであることを忘れてはいけない。事務所の方針を住民に説明し、その反響、不平、不満などを事務所に提出すること。各課との密接な連絡を行うこと」だった。これまで別々の暮らしをしていた人々が、薄い壁一枚で隣人になり、有刺鉄線に包囲された狭い空間で協調しながら生活せねばならない。隣人同士の問題が起きるのは必然だった。日常的な不便や不足から不満がつのってくる。慣れない環境への苛立ち、精神的不安がある。強制収容所生活の苦悩は、日本食や魚の不足、トイレや風呂の不便さ、洗濯場の混雑など、日常生活での具体的な不便さが支配的だった。最初の年は特に収容所側の受け入れ態勢がまったく整っていない状況だった。いかにして当局と掛け合うか、何をどのように要求するのか、指導者が必要だった。だが共同体の常で、住民の間に誤解が生じ、党派が生まれ、政治思想・価値観の違う者たちの対立が生まれてくる。

地区住民の苦情には、1. 幼児の汚れ物を洗濯たらいに入れないこと。2. 女子トイレに仕切りを作ること。3. 女子トイレに五歳以上の男子を入れないこと、のように細々としたことがあった。日常の共同生活であれば、まさにこのように具体的な細々とした苦情が、大きな問題だった。それぞれ規則を作成していかねばならない、まとめ役のリーダーの任務は大変だっただろう。

マンザナー開所まもなく、5月1日の日記には、共同食堂のメニュー作成係の日系住民が、白人の倉庫係と結託して、軍から支払われる食事代をごまかし、食料品を外部に横流しして私利をむさぼっていたという問題が発覚したという記述がある。ヨネダは、5月3日の日記に、外部の友人へ宛てた手紙を写し、強制収容所がひどい状況だったことを次のように書いている。

「最初は精神錯乱者の集まりに似た混乱状態だったが、少しは落ち着いてきた。(略) われわれ共産党員が無抵抗で強制立ち退き令に服したのは、そのことが憲法違反かどうかは戦後に取り上げることにし、何よりも現在の緊急任務は枢軸国撲滅にあると考えたからだ」(ヨネダ101)。

5月15日(金)の記述で、この収容所がキャンプから、「マンザナー戦時転住センター」に改称されたことがわかる。パイオニア・タウンという釣り言葉は、曖昧模糊としていた強制収容を、早急に具体化するための方策だったのだろうか。転住所センターというマンザナーの正式英語名ですら、まだ婉曲表現である。なぜアメリカ市民権を持つ二世を含めた約12万人の日系人を「転住(リロケイト)」するのか。1830年に実施された「リムーヴァブル(移住)」法の前例に照らして、その表現を避けた結果なのか。アンドルー・ジャクソン大統領のよしの強制移住法は、東南部の先住民インディアンをミシシッピ川以西のインディアン・テリトリーへ強制的に移住させる法律だった。強制収容所の運営は、WCCA(戦時市民統制局)からWRA(戦時転住局)へ変わった。

ヨネダたち地区代表者(ブロック・リーダー)は、所内の法律を作成し、あらゆる取り決めをして、問題の処理をせねばならなかった。「シャツ、洗濯桶、ピンなど」盗まれる事件が頻発しており、所内では問題が山積していた。生活面、教育面、文化面での要望をヨネダたちは当局の運営者側へ入れる。共同体を立ち上げる基礎作業をせねばならない。ヨネダの日記の最初から最後まで、そのような住民の苦情を聞いた結果、当局へ提出する要望書の内容が列記されている。いっぽういくらヨネダたちが選挙によって選ばれても、反対意見を抱く者が存在し、思想を異にする人々がいるのは当然だった。保守的でしばしば狂信的な黒龍会メンバーが、マ

ンザナー収容所で反米宣伝活動をしていることが、ヨネダの日記に記述されている。

ここで黒龍会について注釈を加えると、この組織は、1901年、内田良平が主宰して結社した国家主義的団体で、大アジア主義を主張し、31年には大日本生産党に吸収されたが、40年代でも黒龍会として分派が活動していた。特にアメリカで知られていたのは、サトハタ・タカハシ（別名ナカネ・ナカ）で、1903年ごろ、カナダのブリティッシュ・コロンビア州に移住し、市民権を取得し、22年ごろまでカナダ人として居住している。その後、行方不明になるが、1929年にはすでにアメリカへ入国し、ワシントン州タコマヤシアトルに住み、「アメリカ企業の破壊工作」を目的とした親日組織を作っていた。アメリカの黒人活動家と組んで破壊行動をもくろんだこともある。マルコム X の所属していた「ネイション・オブ・イスラム」の指導者イライジャ・ムハマドと関係を持ち、黒人組織を通して破壊工作をたくらんでいた。当然のことながら何度も逮捕され、日本へ強制送還にもなっている。

マンザナー強制収容所や他の収容所で、黒龍会のメンバーが活躍していたことは、ヨネダやミネ・オークボたちの記録にあるが、どこまでいわゆる正統派の黒龍会であったのかは不明である。ヨネダは日記の第八章を「黒龍会の反米宣伝」として、マンザナー強制収容所でのかれらの様子を次のように記している。

「ターミナル島立ち退き帰米青年ベン貴志その他が使用しているごみトラックが、黒地に頭蓋骨と二つの骨を白く塗った旗を立て、自ら黒龍会と名乗って各ブロックを乗り回し、ブロックリーダーや米国の悪宣伝を行っている」（ヨネダ 124）、「自称、黒龍会の帰米青年らがキャンプ中をまわって悪質のデマを飛ばす。『日本はアラスカを爆撃中』、『ミッドウェイ海戦米國勝利は嘘』」（ヨネダ 126）。「黒龍会の帰米青年らはデマ宣伝を盛んにとぼして、キャンプ生活のかく乱を試み、ブロックリーダー会議を破壊せんとしている。『カモフラージュ・ネット（作成作業）に働く者は国賊』、『ブロックリーダーは FBI の犬』、（略）『終戦後に日本人は全部国外放逐』、『ヨネダは朝鮮の犬』」（ヨネダ 129）。「目覚めよ満座那在留民。ここで自治を引き受けるな。カモフラージュは死しても引き受けるな。二世よ戦後日本に帰る気持ちあれば外部労働をするな。満座那黒龍会」（ヨネダ 133）というような貼り紙が、各ブロックのトイレや洗濯場に貼られた。

「カモフラージュ・ネット」とは軍隊に納入される擬装用ネットで、カモフラージュ・ネット・プロジェクトが立ち上げられた。多くの日系市民が生産にたずさわったが、ひも状の黄麻繊維を巨大なネットに編みこんでいく根気のいる作業だった。マンザナーでは、1942年6月から12月まで500人が雇われ、月平均6,000個を製造した（Jane Wehrey66）。ドロシー・ラングがカモフラージュ・ネット作成中の日系女性を写している。その他、ヨネダたちが米軍に志願して以来、黒龍会のメンバーと思われる連中に、ヨネダ夫婦は尾行され（ヨネダ 233）、「ヨネダの奴を不具にしてやる」（ヨネダ 234）と自宅で襲撃されそうになるという出来事が起きている。

マンザナー市民連盟の会合では、会場の電話線が切断され、「帰米組を恐れて」演説を辞退した者のいたことが記述されている。ヨネダの演説に対しては、「自称、黒龍会の連中が『政府の犬』『だまれ赤』などとやじり続け」（ヨネダ 156）、日本派反米派と戦争協力派の間に対立があった。日系人同士の対立感情が数ヶ月もたたないうちに、生命に関わるほど激しくなっていく。カール・ヨネダはファシズム・軍国主義に反対する共産党員だったが、日系社会にはヨネダのようなファシズム反対論者もいれば、日本帝国主義を信奉する自称黒龍会のメンバーのような者がいた。

8月6日に開かれた市民連盟キャンプ大会について、ヨネダは次のように記録している。出席者300余。「連盟の憲法規約に対し、ジョー栗原、ベン貴志らが反対演説をなしたが、結局、賛成一二〇、反対一一四で可決。ただちに栗原が立って、『市民連盟をジャパニーズ・ウェルフェア・フェデレーション（被福祉日本人連盟）』に変更せよと緊急動議を提出し、（略）採決の結果、賛成一一二、反対一二八で否決」（ヨネダ161-62）とある。ヨネダたちのファシズム反対派、アメリカへの戦争協力派が勝利したが、投票結果を見ると決して大多数を占めたのではない。後に収容所では「忠誠審査」が実施され、日系人のアメリカ合衆国への忠誠の意志確認が強制されたが、「ノー・ノー」とアメリカ合衆国への忠誠を否定した者と肯定した者との間に生じた緊張・軋轢・溝の深さは、そのときになって生じたのではない。日系社会は決して一枚岩ではなかったのである。それでも協調して毎日の生活をせねばならない。ヨネダのようなまとめ役、プロック・リーダーがいなければ、マンザナー強制収容所の暮らしはさらに混乱したにちがいない。

カール・ヨネダの日記は、このような共同体の中で生活するとき生じる、集団の党派的な対立、思想上の対立を具体的に伝えている。日常生活はこのような隣人との軋轢や、隣組としての意見の相違やいざこざが支配していただろう。周囲の自然の美しさ后感嘆する余裕がどこまであったのか。かれら日系人の心を占めていたのは、隣人との軋轢や共同体の難しさのほうではなかったか。それが重い気持ちになって心を支配していたのではないか。表面上は、穏やかに「しかたがない」と諦めながらも、はやく外に出て、個人を尊重する暮らしに戻りたいと願っていたにちがいない。

マンザナー強制収容所の実態とは、カール・ヨネダが日記に残したような、日々の軋轢の状況ではなかつたらうか。日系人の強制収容は、アメリカ当局の混乱のうちに準備不足のまま開始された。収容所対策に関して決まりもなく、また変化する当局の姿勢に、住民は常に不安な状態に陥られた。それでも大きな反乱がなく、強制収容所が42年から45年まで住民を抱え、最終的に46年に閉鎖するまで運営され続けたのは、日系人が穏やかで「しかたがない」という姿勢を取っていたからだろう。

たとえばトパーズ強制収容所へ送られたミネ・オークボについて、ヴィヴィアン・フミコ・チンは、次のように分析している。

当時の政治風土の中で、強制収容に対する治療薬はない、とオークボは考えていたのはいか、望ましくない情勢になったとき、それに対処する方法はない、天候が変わるまで待たねばならないと（Chin 72）。収容された日系人の中には狂信的な日本派がいても、基本的には平和愛好者が多かった。

自称黒龍会メンバーによる挑発的なポスターは写真に残っていない。集会の様子や集団の対立、襲撃事件ももちろん写真に記録されていない。写真に撮っていたにしても検閲に引っかかり、残されることはなかつたらう。強制収容所の正式に残された記録には、当然のことながら収容所の実態がすべて写されているのではなかった。

10.

アンセル・アダムズは、まだ戦争の終結していない1944年に、ふたたびマンザナーを訪れ、

近隣の写真を撮っている。ミネ・オークボは収容所の砂嵐のひどさに、だれもが困惑した思い出を記している。ところがアダムズのこのときの写真は、大風に砂が舞い上がるマンザナー近辺の景色を、じつに美しく切り取っている。空の薄雲の動き、中景のなだらかな山並みの重なり、そして、砂嵐のたなびきが地上に白く細い線を描き出している。白い砂嵐の中に黒く浮かぶのはまばらなポプラの木立である。絵画的なこの写真は、そのすぐそばにマンザナー強制収容所があることを沈黙させる。

写真を撮り、それを公刊することは、一つの社会的主張をすることである。「社会派の写真は人間味に欠ける」というアダムズの意見を、そのコンテキストを十分に吟味せずに曲解し批判してはならない。それでも1944年のマンザナー近隣の砂嵐の写真を合わせて考えるとき、私たちはふたたびアンセル・アダムズの写真集『自由と平等のもとに生れて』のテキストに戻って、批判的に検討せねばならない。ニューヨークの近代美術館(MoMA)の写真部門によって、展示会用に現像され、キャプションが付けられた写真集は、1944年に刊行された。刊行にあたって、写真もテキストも連邦政府国務省WRA(戦時転住局)の許可を得ており、マンザナー強制収容所の企画委員長の許諾を得ていると、アダムズは慎重に断っている。まさに写真集が「一つの社会的主張」になるからである。それではアダムズの『自由と平等のもとに生れて』はいかなる社会的主張になっているのか。

序文でアダムズは、「聳え立つ山々に囲まれ、砂漠の荘厳さがマンザナーの人々の精神を強くしたと思う」(Adams 13)と記した。強制収容所はいずれも不毛の半砂漠地帯に設けられ、近くに聳え立つ山々が多かったのは、マンザナーにかぎらず、ユタ州のトパーズもワイオミング州のハートマウンテンもカリフォルニア州北部のトゥーリ・レイクも同じである。トパーズ収容所へ入れられたミネ・オークボは、「典型的なトパーズの景色は、監視塔、有刺鉄線、タール塗りの平屋のバラック、それに遠くに見える山々だった」(Adams 45)と書いている。西海岸沿いに暮らしていた日系人の多くは、カリフォルニア州の背の低い茶褐色の山並みに慣れてしたが、聳え立つ山脈は印象的だった。その壮大な景色が記憶されているのは、自然の偉大さを感じていたからだろう。だがアダムズの主張のように、「壮大な光景と太陽・風・空間の厳しい現実、アメリカの広大さ、アメリカにあるチャンス(好機)を象徴している——強制された脱出の後に生存を再保証している」(Adams 13)という記述は、アメリカ的楽観主義が濃厚に支配しているとは言えないか。この写真集は特定の民族集団とその問題を社会学的に分析したものではない、とアダムズは強調し、日系人を抽象的な集団として取り扱うのではなく、「個人とその環境の現状」を表現するのが目的であり、個人がもっとも重要であると繰り返し述べている。その繰り返される言葉に、かえって疑いの念を抱かせる。いまだ戦争中だった合衆国に対して、日系人強制収容所の存在理由を否定するような言辞が許されなかったためだろうか。政府を刺激するような表現に慎重にならざるをえなかったのは確かである。それでもアダムズの1944年のマンザナー近隣の写真表現があり、「自然の力」への強い信仰、アメリカの信条として「大自然」の存在を讃美するアダムズの言葉に、私たちは今一度、留保を置かねばならない。

序文の後に続く章で、「土地」という章題でアダムズが語り始めるのは、マンザナーの自然である。その書き出しは次のようである。

「陽光があたりを包み、土地の広々とした空気がカリフォルニアのオーエンズ・ヴァレーを支

配している。二つの聳え立つ山壁の間に、200マイルほどの狭い半砂漠の平原が脈打っている (throbs)。(略)大陸横断鉄道や幹線道路の北にはリノがあり、南にはロスアンジェルスが控える。やがて頭上には定期便や遊覧飛行機が轟音を響かせるだろう。自動車がハイウェイを走り、高い山々まで登って行くだろう。谷間を南へ降りていくと、オーエンズ川がビショップの町の近くに長い溪谷を刻み、湿地帯や柳の木立を作り、肥沃な土地を生み出している。(略)これらの美しいポプラの木は、空に向かって伸び、コットンウッドや柳、ラビットブラッシュやセージとは鮮やかな対照をなしている。マンザナーの地上10マイルに、ウイリアムスン山の頂がある。海拔14,384フィートのこの山は、澄んだ光の中で荘厳な輝きを見せる。この魔法の山は、インヨー郡を最高に引き立たせている。(略)嵐のときには、シエラ山脈の峡谷から、霧が東に向かって降り、灰色の渦巻く流れになって平原に大雨を降らす。頻繁に雷がとどろく。冬には、シエラ山脈は地面から空までひっきりなしに降り注ぐ雪で覆われる。春と夏には、小川は水を豊かにたたえ、緑の土手沿いにせせらぎの音が聞こえる。険しい岩や峡谷の間をはるか遠くまで男たちは歩きまわる。秋には、砂漠の丘やシエラ山の輝く花崗岩の赤銅色や青い色合いに波打ち、地面は黄金色に覆われる」(Adams 31-32)。

アダムズはマンザナーの土地と自然をこのように描き出す。陽光に恵まれ、大都会を控えて、近い将来、行き来は頻繁になり、経済的に繁栄するだろうという暗示、水は豊かで土地は生産性が高い、心を沸き立たせるような魔法の山、せせらぎの心そそる音など、マンザナーという土地がまるでアメリカの大西部の理想郷のように見えてくる。だが、秋を描く文章はどうだろうか。実りの秋ではなく、茶褐色に覆われた山や平原が「脈打ち」という命のうごめきを感じさせる動詞を使いながら、じっさいは乾燥した不毛の土地の描写である。そこに巧みな隠蔽の技すら感じさせられる。

その後に続く文章では、大都会ロスアンジェルスや南カリフォルニアの水源となったために、豊かな水脈が濫用され、自然が破壊され、木々が枯れ、農地が耕作不能になったこと、しかしまたコロラド川の豊富な水量が還元され、息を吹き返しつつあることが語られている。「やがて何年かたって回復すれば、昔のようにみずみずしく豊かな実りをふたたび享受できるようになるだろう」(Adams 32)と述べたあと、この土地が「ザ・プレイス」、すなわち強制収容所になったことを告げている。すでに果樹栽培が放棄されていたマンザナー（りんご園）は、住居は打ち捨てられ、東へ数マイル行ったところに鉄道駅があるばかりの、死んだような場所になっていた。だがここでもアダムズは、強制収容された日系人が短時日のうちに住居を整え、共同体を作り上げたことを指摘し、「マンザナーは人口一万人の、統一され機能する町になった。国家的に重要な意味を持つ町の実体である」(Adams 35)と誇らしげに述べている。

マンザナーが白人の世界になっていくのは、19世紀半ば、鉱山で大儲けをしようと山師たちがシエラ山脈を越え、オーエンズ・ヴァレーへ入ってきたときで、それまで何百年もここは先住民パイユートの居住地域だった。白人はパイユートを南カリフォルニアへ追い出し、その後に入ってきた牧場主たちが谷間を牧場に変えていった。1910年、「マンザナー灌がい農場」が始められ、りんご、なし、桃の栽培で繁栄するが、1913年に完成したロスアンジェルス導水渠は致命的な水問題を発生させた。26年、ロスアンジェルス市がマンザナーの果樹栽培地を買収し、水利権を獲得すると、果樹栽培は衰退する。34年、ロスアンジェルス市はマンザナーへ灌がい

用水の供給を停止し、35年、最後の栽培農家がこの地を去る（Wehrey7）。

1942年、ロスアンゼルス市は軍の要請を受ける。導水渠から1マイルの場所がキャンプ建設地になることに逡巡したが、導水渠は軍隊が防護するという条件で、日系人収容所に6,000エーカーの土地を貸与した。「ひどく荒涼とした果樹耕作地」と形容されたマンザナーはこのようにして強制収容所に変貌していく。1942年3月6日の新聞「インヨー・インディペンデント」紙号外には、この谷間に「ジャップ再定住キャンプ」が建設されることを伝えている。工事現場は婉曲的に「作業戦域（シアター・オブ・オペレーション）」と呼ばれ、「最低限の健康と衛生」が保たれるバラック建設が目的だった（Wehrey 35）。

11.

このようなマンザナー強制収容所の生活を「記録」したアンセル・アダムズは、アメリカの大自然が人間に与える希望に、アメリカの未来をゆだねている。写真集が『自由と平等のもとに生まれて』という題であるのも、アメリカの信条（アメリカン・クリード）をそのまま日系アメリカ人へも適用しようとしているからである。アダムズは、「アメリカニズム」を純朴に信じる、一人のアメリカ人だった。アメリカ人は、概して「他の人々よりずっと庇護され、安全を確保されている。私たちはアメリカニズムを当然のことと考えている」と結びで記している（Adams 116）。強制収容所で出会った日系人は、その悲劇的な状況にもかかわらず、アメリカに対して決して希望を失ってはいなかった。「じっさい、以前にもましてアメリカ生活を信じる気持ちは強く深いものだった。かれらは『何よりも他のアメリカ人とうまくやっていきたい、人種の差異を避けて、誰にも負けず善良なアメリカ人であることを証明したい』と望んでいた」（Adams 118）とアダムズは力強く記している。

だがアダムズの考えるアメリカニズムには、極度の楽観主義が見られないだろうか。あるいは「偉大なるアメリカ」信仰と言い換えてもいい。「偉大なるアメリカ」が強制収容という違憲行為を犯していることをいかに理解したらよいか、アダムズ自身が混乱していたのかもしれない。強制立ち退きは正しいことなのかという疑問は、良識あるアメリカ人を戸惑わせていた。マンザナーのメリット所長は、苦し紛れに次のように答えている。

「強制立ち退きは正当化されるかだつて？（略）1942年の強制立ち退きは、軍隊の必要上ということと正当化されたし、これからも正当化される。それは正しいことだった、と私は言っていない。正当化されたと言っているのだ」（Adams 46）。

アダムズは写真集に付したテキストの中で、しばしば「マンザナー以降」について言及する。すなわち、戦争が終わり、強制収容所が解体されたあと、いったい何が残るのか。バラックは壊され、すべてなくなった平原をまた風は吹きまくり、雪が降り、夏の熱い太陽がセージに養分を与えるだろうが、「マンザナーという人間の挑戦は、アメリカ全土に執拗に生起するだろう——そしてアメリカはその測り知れない意味合いを否定することはできないのである」（41）。

このアダムズの言葉をいかに解釈したらよいただろうか。アダムズは「意味合い（implications）」という表現を複数回使っている。「マンザナー」というアメリカの歴史的事実が、史上から消えることはない。実践されたことは後世においても残り続け、「執拗に生起する」と言っている。

そのときアダムズは、居留地へ閉じ込められた先住民の運命を想起していたのではないか。日系人収容と重ね合わせて考えていたのではないか。

先住民アメリカ・インディアンの——白人にとっての——問題は、黒人奴隷問題とは根本的に異なり、18世紀の建国の父たちは——たとえばフランクリンが明言しているように——やがて解決すると考えていた。すなわち「インディアン絶滅政策」である。19世紀には白人の開拓者が襲撃されないように、先住民インディアンをミシシッピ川以西へ立ち退かせた。かれらがアメリカ市民権を獲得するのは、日本からの移民がほとんど禁止された1924年の法律によっているが、それまではアメリカ市民ではなく、北アメリカに居住する「外国人」という苦しい法的解釈がなされている。ところが21世紀の今日、先住民インディアン問題は解決したのか。解決してはいない。居留地に住むインディアンの保護政策は、アメリカ政府の経済的負担になっている。部族によっては、自分たちは主権国家を運営していると主張する。したがってアメリカ合衆国のパスポートを否定する。

「マンザナー」の挑戦をする以前から、アメリカ合衆国は、インディアン隔離政策が問題解決にならなかったばかりか、「執拗に生起する」歴史的挑戦になっていた。かれらとの困難な関係はいまだに継続し、連邦政府の頭痛の種になっている。

WRA（戦時転住局）局長ディロン・S・マイヤーは、強制収容された日系人を寛容に取り扱った、日系人に尊敬された、マイヤーの姿勢は正しかったなど、アダムズは結びの言葉でマイヤーを引用し、賞讃している。マイヤーの発言でも、これまでに引用されたものを読む限りは、必ずしも人種主義者という像は浮かびあがってこない。ところが、最近の研究では、いかにマイヤーが「インディアン問題絶滅」に奮闘した張本人であるかが明らかにされている。情報開示法の結果、調査が可能になったからだが、リチャード・ドリノンは、『強制収容所の管理者——ディロン・S・マイヤーとアメリカの人種差別主義』（1987）によって、戦後、トルーマン大統領の指令でBIA（インディアン局）の局長になったマイヤーは、予算をふんだんに獲得し、インディアン問題を絶滅（terminate）するために活躍したことを実証する。ドリノンは、日系人の強制収容を総指揮したマイヤーと、戦後、インディアン問題を解決しようとしたマイヤーの思想は継続していると主張している。

アダムズは、日系人強制収容を弁護して次のように述べている。「私たちは国家として、歴史上、極度に不安定な状況に直面していた。驚愕し、傷ついており、戦闘準備はまったく整っていなかった」（Adams 46）。突然に起きた「パールハーバー」のために、強制収容はアメリカが国家として取らざるを得ない処置だったという論理である。日系家族の転住（リローケーション）が、他のアメリカ人と比べて、それほど悲痛な出来事だったのだろうか、とアダムズは自問する。「全米各地に離散してしまった家族や友人のことを考えてみよう。日系アメリカ人を西海岸から立ち退かせたことが、他の何百万のアメリカ人の悲惨さと比べて、よりひどく心を痛め、つらいことだったと断言できるだろうか。通常の戦争貢献に加えて、強制的に押しつけられた集団移住だったことは、他と比べて不幸だったとは言えるだろう」（Adams 59）。それでも戦時下、特に「パールハーバー」のあとではいたしかたなかったという含みの文章である。

いっぽう、日系人がアメリカ社会へ同化することを拒否するどころか、同化を望んでいることをアダムズは強調する。「もっと同化したい」（Adams 97）と言ったという若い農夫の言葉を

引用する。かれらは強制収容を恨むのではなく、「私のアメリカへの忠誠心は強いものです。ですから強制立ち退きの試練に耐えられたのです」(Adams 69)と誇らしげに語る主婦の言葉を引用する。この主婦は、アメリカを自分の祖国、故郷(ホーム)と見なしているとアダムズは伝える。二世の青年が、「ぼくたちはアメリカ人なんです」(Adams 112)と明言したことを記すアダムズは、そのような日系人を個人として、アメリカ社会がどのように扱うべきかを考え、このテキストの中で、未来のアメリカ社会像を描き出そうとする。

戦争が終わったらどうなるのか。日系人へのさまざまな意見があるのは、個人の自由であり、民主主義国家では認めねばならないが、「人種差別的プロパガンダ」(Adams 113)は、自分たちアメリカ人にとって精神的にも社会的にも危険である、と警鐘を鳴らしている。先住民インディアンの居留地への立ち退き政策が、決して成功しなかったという歴史的事実に目を向け、未来のアメリカ社会が、同化を望む日系アメリカ人を除外し、隔離することは間違いである、とアダムズは強く宣告する。

1944年「フォーチュン」誌4月号は日本特集をした。ミネ・オークボはトパーズ収容所にいたが、ニューヨークに出てきて「フォーチュン」誌特集号のイラストを担当するように要請される。「一世・二世・帰米」というタイトルの特集は、「当時の大手の雑誌がイラスト入りで日本特集をした最初だっただろう。東部ではまだ日本についてほとんど知られていなかった」(ミネ・オークボ47)。アダムズはその記事から数行引用し、日系人強制収容所がインディアン隔離政策による居留地の二の舞になってしまうことを懸念している。「1942年43年の『保護的拘留』が一種のインディアン居留地になり、将来、何年にもわたって確実にアメリカ人の良心を悩ませることになるだろう」(Adams 113)というフォーチュン誌の記事にアダムズは深く共感する。

アダムズが集団よりも個人を写すのだと宣言したとき、いわゆる社会派のドキュメンタリー写真家に対する批判が含まれていた。少数民族集団、下層階級、難民などアメリカ社会の貧困者層を社会環境問題の犠牲者として記録する写真への抵抗をあらわしていた。だがアダムズのテキストを熟読し検討してみると、強制収容という手段で西海岸の日系人を十把一からげにしてしまう政策こそ危険だ、と指摘しているように推測されてくる。アメリカの日系人を集団ではなく個人として認識せねばならない。西海岸の日系人が祖国の帝国日本のためにスパイ行為に走るのではないか、破壊工作をしているのではないか、という根拠のない恐怖によって、日系人の集団強制収容は始まった。それに対してアダムズは、じっさいそのような危険分子がいたとしたら、当局は、適切な処置を取り、的確に対処しているであろうと述べている。「これまで危険な反逆者はとっくに逮捕され、相応の処置がされていた」(Adams 112)という事実をアメリカ人読者に思い出させる。そのような個人がいたとしても、同じ民族集団を一つの価値基準で評価してはいけないと主張する。

民主主義の原理を口に出して唱えることはたやすいが、「(民主主義に)反する声があれば立ち上がり、原理のために闘うこと、それはまた別」(Adams 113)であり、ほとんどの人々がしり込みする。アダムズは、西海岸の排日主義が民主主義の原理、アメリカの信条に反すると考えていたにちがいない。政治家は票につながることを考えるので、日系人問題を骨折って解決しようとは思わない。「その隠された意味を含めて、この人間としての問題に挑戦する勇敢な政治家はほとんどいない」(Adams 113)とアダムズは結論で弾劾する。寛容とか公平という言葉

をどこまで私たちは深く執拗に考えているだろうか。口先だけではなく、行動にあらわさねばならないとアダムズは訴える。

現実に日系人強制立ち退きは実行され、強制収容所が建設され、アダムズが訪れた1943年秋、44年にはまだ収容所に多くの日系人が閉じ込められていた。日系人への恐怖は人種偏見に満ちた、根拠のないものであり、そのような人種差別的プロパガンダに人々は惑わされてはならない。そのためにはどうしたらよいか。アダムズは教育の重要性を説く。「このような狡猾なプロパガンダは、教育および憲法が保証することを偏りなく適用することによって無化されねばならない」(Adams 113)。アダムズはアメリカの教育に信頼を置いていた。未来を担う若者への期待が大きかったから、最初に述べた高校生の登校風景を見開き頁で紹介したのだろう。

最後にアダムズは、人権の尊重を繰り返している。

「個人の権利は私たちの社会で第一義的に聖なるものであり、感情・報復・憎悪・人種的敵意によって普遍的な正義と慈悲の原理が曇ることがあってはならない」(Adams 118)。

アダムズの戦争貢献（ウォー・エフォート）とは、マンザナー強制収容所の日系アメリカ人の肖像を写すことだった。その歴史的現実を記録することだった。さらにその作業を通して、アメリカの建国の原理を今一度思い出し、そのすばらしさを人々に想起させ、アメリカの信条を突きつけることだった。アダムズのテキストを読んでいると、アメリカへの強い思い、本来のアメリカへの信頼は揺らいでいない。アメリカの精神基盤である独立宣言と憲法によって保証されている、万民の平等と自由という信条を記憶しようという強い意志が伝わってくる。

個人の肖像写真の意味は、日系人もアメリカ人である、という強い主張である。「アメリカの生徒」、「アメリカの家族」というキャプションや、理想のアメリカ的家庭像を写し、軍隊へ志願するようになった二世の制服姿を写したのは、アジアの顔をした「アメリカ人」を写真を通してアメリカ社会の日常の一部にする作業であった。アダムズはかれらを含めた群像こそ未来の「アメリカ人」であると考えていた。FDRは日系志願兵の442部隊結成にあたって、「アメリカニズムは心の問題」であり、「決して人種や祖先の問題」ではない、身体的な異質性は除外の基準にならないと演説したが、アダムズはそのアメリカニズムの主張を、政治的にではなく、真のアメリカ的精神のありかたとしてとらえていた。

アダムズが提言するのは、日系アメリカ人を一箇所へ閉じ込め、敵性外国人集団としてくくり、そのような集団として一律に評価するのではなく、アダムズが写した個人の肖像写真が語るように、個人として評価すべきだということだった。アメリカ社会へ忠実である者を、アメリカ社会へ個人として喜んで受け入れねばならない。かれらがアメリカ合衆国へ忠誠を誓うのであれば、早いうちに収容所から解放し、全米各地へかれらを送り出し、自立させねばならない。「忠実な日系アメリカ人を全米各地へ送り出すこと、それこそ民族集団地域に（戦後）ふたたび集合するよりはるかに望ましい。職業・教育・休養を求めてアメリカ中を自由に移動しながら、かれらは個人として、自分の能力を発揮したいと願っている」(Adams 112)とアダムズは語っている。ロスアンジェルスのリトル・トーキョーのように地域的に群れをなせば、そのことこそアメリカ社会にとって危険だとアダムズは懸念していた。マンザナー強制収容所で撮影を開始したとき、個人の肖像写真にこだわったのは、このような信念からだったにちがいない。

12.

だが今日、アダムズの写真集に違和感を覚えるのは、なぜだろうか。満面の笑みをたたえた「期待されるアメリカ人」像に、軍服や看護師の制服姿の肖像写真に、「理想のアメリカの家庭」像に、そのキャプションを含めてアメリカ礼讃の一方的おしつけを感じてしまうのは、なぜだろうか。

イリーナ・タジマ・クリーフは、アダムズの肖像写真を当時の反日思想のなかで描かれる否定的な日系人像を崩し、忠実なアメリカ人像を視覚的に構築しようとした結果であると分析する。「日系アメリカ人が脱オリエンタル化され、紛れもないオール・アメリカンな市民」(Creef 19)に作り上げられている。たしかにかれらの服装、髪形、アメリカの雑誌のカヴァーガールに典型的に見られる白い歯を見せた満面の笑顔、自信に溢れた安定した表情は、理想のアメリカ人像で、アダムズはそうにかれら日系人を描き出したのである。クリーフは、それを「非他者であり西洋であり——決してアジアではない——すぐにアメリカ人とわかる」(Creef 21)ように、まるで「忠誠心の視覚的証拠」(Creef 21)とでもいうようにアダムズは目論んでいると言う。

ここでクリーフは面白い指摘をしている。25枚ほどの肖像写真のうち、ほとんどが日系人の成人男性を写しているなかで、女子生徒の写真が4分の1を占めていることであり、いっぽう男子生徒の写真がないという点である。アメリカの未来を託す者として女子生徒を選んだのは、「教育可能なアメリカ市民」(Creef 22)であると見なしたからであり、戦後のアメリカ社会を建設する未来のアメリカ人をかれらは生み出すからであると言う。クリーフは、戦後の日系アメリカ人女性が白人男性と結婚する例が急増したことを指摘している。もちろんそれには法律の変更が関係しているのだが、戦前には予測できなかった日系アメリカ人の考えかたであり、感情の変化だった。「より完全なアメリカ化の過程では、日系アメリカ人の身体と血が、白人男性にさらに役立つようになる」(Creef 22)というクリーフの括弧に入れた指摘には、首を傾げざるをえないのだが。

反日勢力が占めるアメリカ社会に、アダムズはアメリカの理念である民主主義・個人主義、自由・平等の理念を思い出させようと、日系人をアメリカ化するのに骨を折った。マンザナー強制収容所の「日系アメリカ人を白人の視線に対して人間化」(Creef 19)する作業をアダムズは担ったとクリーフは言う。日系人がアメリカ社会に受け入れられるようにという単純な希望からだったのだろうか、アダムズはそれがアメリカ中心主義であることには気付いてはいなかった。

「非他者であり西洋であり——決してアジアではない」肖像写真は、究極のところその人物の否定でしかない。文化人類学者ドリーン・コンドウは、「顔はアイデンティティの身体的場」(Creef 19)と言っているが、「アジアではない」ことを求めることは、その個人の存在を否定することである。日系アメリカ人女性と白人男性の結婚が、究極的なアメリカ化のプロセスであるとしたら、それは「一からなる多」というアメリカの信条の否定にもなる。

南西部を撮り続けたアンセル・アダムズは、アメリカの大自然に魅了された。自然の魔力の虜になり、アメリカの大自然から生命の力を獲得していた。艱難辛苦の中、19世紀のアメリカの開拓者たちを鼓舞したのはこの自然の魅力であり魔力だった。かれらはそこから生き延びる力を得た。アメリカの大自然は自分たちの人生そのものでもあった。それゆえアダムズは、マンザナー強制収容所を記録するとき、周囲の大自然の力を強烈に感じ、それを記録したいと願ったのである。大自然が保証する個人の生命を、すなわちアメリカの信条がうたう個人主義、個人の自由を表現したかったのにちがいない。

けれどもアダムズの写真集は、アダムズのアメリカニズム、その「アメリカ信仰」という思想を強調するあまり、アメリカ讃歌が強く前面に押し出されてしまった。「美しいアメリカ」が恣意的に作り出されてしまったと言っていいだろう。マンザナー日系人強制収容所は、あくまでも歴史的現実であり、その写真集は歴史的記録である。戦時下という異常事態のもとで、アダムズの写真集は、なお肯定的なアメリカニズムを表現しようとしている。それは現実の収容所生活の記録にはならなかった。

引用文献

- Adams, Ansel. *Born Free and Equal: The Story of Loyal Japanese Americans: Manzanar Relocation Center, Inyo County, California*. Ed. Wynne Benti, Bishop: Spotted Dog P, 2001.
- Alinder, Jasmin. *Moving Images: Photography and the Japanese American Incarceration*, Urbana and Chicago: U of Ill P, 2009.
- Alinder, Mary Atreet and Andrea Gray Stillman ed. *Ansel Adams: Letters 1916-1984*, Boston: Little, Brown and Co., 1988.
- Chin, Vivian Fumiko. "Gestures of Noncompliance: Resisting, Inventing, and Enduring in *Citizen 13660*," 67-81. *Citizen 13660*.
- Conrat, Maisie & Richard. *Executive Order 9066: The Internment of 110,000 Japanese Americans*, Los Angeles: Ritchie & Simon, 1972.
- Creaf, Elena Tajima. *Imaging Japanese America: The Visual Construction of Citizenship, Nation, and the Body*, New York: NYUP, 2004.
- Drinnon, Richard. *Keeper of Concentration Camps: Dillon S. Myer and American Racism*, Berkeley: U of California P, 1987.
- Eaton, Allen H., *Beauty Behind Barbed Wire: The Arts of the Japanese in Our War Relocation Camps*, New York: Harper & Brothers Publishers, 1952.
- Flyer, Heather. "Miné Okubo's War: Citizen 13660's Attack on Government Propaganda," 82-98. In Greg Robinson & Elena Tajima Creaf ed., *Miné Okubo: Following Her Own Road*, Seattle: U of Washington P, 2008.
- Fugita, Stephen S. and Mariloy Fernandez. *Altered Lives, Enduring Community: Japanese Americans Remember their World War II Incarceration*, Seattle: U of Washington P, 2004.
- Gesensway, Deborah and Mindy Roseman. *Beyond Words: Images from America's Concentration Camps*, Ithaca: Cornell UP, 1987.
- Girdner, Audrie and Anne Loftis. *The Great Betrayal: The Evacuation of the Japanese-Americans During World War II*, London: The MacMillan Co., 1969.
- Gordon, Linda and Gary Y. Okihiro ed. *Impounded: Dorothea Lange and the Censored Images of Japanese-*

- American Internment*, New York: Norton & Co., 2006.
- Grodzins, Morton. *American Betrayed: Politics and the Japanese Evacuation*, Chidcago: U of Chicago P, 1974.
- Kashima, Tetsuden. *Judgment Without Trial: Japanese American Imprisonment during World War II*, Seattle: U of Washington P, 2003.
- Muller, Eric L. *American Inquisition: The Hunt for Japanese American Disloyalty in World War II*, Chapel Hill: U of NCP, 2007.
- Nagata, Donna K. *Legacy of Injustice: Exploring the Cross-Generational Impact of the Japanese American Internment*, New York: Plenum Press, 1933.
- Okubo, Miné. "Statement Before the Commission on Wartime Relocation and Internment of Civilians," 46-49. In Greg Robinson & Elena Tajima Creef ed., *Miné Okubo: Following Her Own Road*, Seattle: U of Washington P, 2008.
- Robinson, Greg. *By Order of the President: FDR and the Internment of Japanese Americans*, Cambridge, MA: Harvard UP, 2001.
- Robinson, Greg & Elena Tajima Creef ed., *Miné Okubo: Following Her Own Road*, Seattle: U of Washington P, 2008.
- Sasaki, Lili. "Pioneer Communities," 45. In Deborah Gesensway and Mindy Roseman. *Beyond Words: Images from America's Concentration Camps*, Ithaca: Cornell UP, 1987.
- Stowe, Harriet Beecher. *Uncle Tom's Cabin*. Ed. Elizabeth Ammons, New York: Norton & Co., 1994.
- Takaki, Ronald. *Strangers from a Different Shore: A History of Asian Americans*, New York : Penguin Books, 1990.
- Wehrey, Jane. *Images of America: Manzanar*, Charleston: Arcadia Publishing, 2008.
- ミネ・オークボ (前山隆訳) 『市民 13660 号——日系女性画家による戦時強制収容所の記録』 御茶の水書房 1984.
- 多木浩二 『写真論集成』 岩波書店 2003.
- 宮武東洋 『宮武東洋の写真』 (*Toyo Miyatake Behind The Camera 1923-1979.*) 文芸春秋社 1984.
- カール・ヨネダ 『マンザナー強制収容所日記』 PMC 出版 1988.